532-254ハ
1200501498092
32
254ハ

35.12.27

21-57

文部省認定
文部省推薦

支那小史

黄河の水

〔増補新版〕

鳥山喜一著

東京 刀江書院

昭和十三年 帝國圖書

532
254ハ

增補版の發行に際して

いま我が國が戰ひつゞけてゐる日支事變は我が國の運命の上に、はたまたアジヤの上に、非常に重大な意義を有つものであることは、もとより云ふまでもありませんが、それは更に世界史の上にも、大きい役割を演じて行くものとなりませう。

古い支那と共に、移り行く支那の姿を描いて、歷史のもつ意味を、少年子女の常識としたいと念じてゐる著者には、それが今なほ進行中の事件であるからと云ふので、此の重大事を其のまゝにして置くことは、何か怠惰なやうな、無責任なやうな氣がしてならなくなりました。之れが玆に此の增補版—初版からは第四回の增補ですが—を取りあへず世に送ることゝした動機であります。

之れによつて新聞雜誌などの記事で、詳しいけれどもとかく斷片的な知識となつてゐる事柄が、多少なりとも組織的に系統的に、少年子女に理解されることゝもなれば、著者の喜び之れに過ぎるものはありません。こゝにも曾てと同じやうに、此の書を其の愛する子女弟妹にすゝめられる世の父兄母姉の方々に、さうした御誘導をも、勝手ながら、希望して已まない

次第であります。

昭和十三年十二月北支の古蹟戰蹟への巡禮を控へて

著者

改版の言葉

「黃河の水」の初版を世に送つてから、十年になりました。十年といふ月日は決して短いものではありません。此の短からざる時の流れのやうに、絶えず盡きず、此の書が其の生命を持ちつゞけて來たといふことは、つぎ〳〵に其の愛する子女に弟妹に、此の書を提供された、大方の父兄母姉がたの御好意によることゝ、深く感謝の意を表する次第であります。

此の十年の間に、東アジヤの形勢は、實にたとへやうもない程に、多くの變化を蒙りました。さうした變化に應じては、出來るだけ多くを、出來るだけ早く取入れることによつて、最も新しい知識を傳へたいと、此の書は絶えざる努力をいたして來ました。それは二五〇頁に過ぎなかつた初版が、今年三月の增補版――それは特に序文を書きませんでしたが――では、二八〇頁となり、此の改版では三〇〇頁を超過した量の上からもいへばいへます。

然しまだ〳〵全般的にいつて、意に滿たない個所も少くないことに、かねてから氣づいてもゐましたし、最近の滿洲國の建國などについては、滿洲や朝鮮の過去を、今までよりは、一層

はつきり描き出して置くことが、必要であらうといふ考も強くなりましたので、さうした質の上からの增補改訂といふことをも計畫して、玆に改版を出すことゝした次第です。

從つて此の改版では幾分か組立の變更もし、挿畫も地圖も大部分は新にして、改版の氣分を十分に盛らうとつとめました。此の改版「黃河の水」は舊版——舊流に對して、例へば多少、波を擧げ堤を打つといふ趣はあるにしましても、黃河の水は畢竟「黃河の水」でありまして置きました。

此の書はもと〳〵「少年子女のために」といふ立場から、執筆したもの故——事實は思ひもかけなかつた廣い範圍の讀者層をもつことゝなりはしましたが——そこに幼稚な比喩や表現が、時に現はれても來たのです。實はさうしたものは、此の際やめてしまつたらといふ御注意もなくはなかつたのですが、未練と申しますか、何となくさうした個所も、邪魔にならない程度は、其のまゝにしておきました。またそれは恐らく十年の昔から、此の名を知つて下すつた、古き愛讀者の方々にも、心を惹くべき何物かゞあらうかとも、想はれるからであります。

謹んで古き愛讀者に、改めて此の書を捧げます。

昭和十年十一月十五日

滿洲旅行の途次、奉天にて北支の形勢を聞きながら

著者

改訂增補版を世に送るに當つて

此の序文も亦さきにものしたのと同じく、其の子女のために、此の書を手にせられる世の父兄母姉の方々に捧げる。

「黃河の水」に、さゝやかながら、新らしき試みをしてから、四年餘りは經ちました。其の間に於ける支那の事情といふものは、めまぐるしい程の變化でした。常に此の書をup to dateにと心がけて居た私は、いくたびか其の增訂を企てたのでしたが時がなく、加ふるに二年有餘の外遊は、一層その希望の實現を困難にしてしまひました。然し我が日本の國運の上にも、重大な機會が來ましたとき、幸にもやつとその希望の幾分でもを、遂げられる時間を得ましたので、こゝに最近事變までを加へた增訂版を、公にすることゝいたしました。實は此の際に思ひ切つた改訂をとも、思はなくもなかつたのですが、それにはまだ十分に時が熟して居ませんので、增補といふことを主とするにとゞめました。

私が東洋史殊に支那史の、少年への味解といふことを試みたことは、幸にも多少の效果反響を、もたらしたやうに見受けられました。それは此の書が豫想外に歡迎されたといふこ

此の書を手にされる方々へ

此の小著は昨年始め、舊友大和君の經營した彌圓書房から出版した、「黄河の水」の變身であります。一年餘りで三版を重ねましたが、大和君が其の事業から身を退くことゝなつたので、尾高氏の好意で、同氏の刀江書院から改版して、茲にまた世におくることゝなつたものなのです。書名ももとのやうにしましたが、たゞ内容を一見して明にするため、今度は「支那小史」といふ名を冠らせることゝしました。

私が此の書に於いての試みは、支那の文化史的發展のあとを、最も平易な用語と敍述とで、少年にもすぐ諒解し得る程度に通俗化し、然もそれによつて、支那の正しい觀方(みかた)を導く、一つの手段にもといふのにありました。尤も通俗化といひましても、逸話や傳説の寄木細工をして、能事了はれりとする、いはゆる少年物とは道を異にしました。かくいへばとて、傳説や逸話を決して斥けたのではありません。時には却てやゝ誇張したる形に於いてさへ、之れを利用もしたでせう。また私は極めて通俗化したる敍述の中にも、高い史觀からの批判

とばかりでなく、此の書に模倣したと想はれるものが、二種ばかりも、出版されたといふ事實の報告を、受けたからであります。しかもその中には、私が曾ての支那旅行の折に撮影した寫眞を、無斷で此の書から轉載されたと思はれるのもありました。

然し私はそれを喜びこそすれ、批難すべき何等の理由も有ちません。私はもと〳〵支那史に興味をもたせるべき運動への、小さき試みとして、此の書を世に問うたのでありますから、其の運動に同じ、これに倣ふ人の現はれて來たことは、衷心からの喜びであります。ましてそれが此の書から借りるところがあつたとすれば、それだけ私の喜びは大きくなるわけであります。私はもつと完全なものを、後に來るべき人々に、期待したいのであります。

それにしても、私は私として、愛讀者の好意や助言や教示等によつて、此の書もまた、出來るだけ完きものへと、近づかせたく考へて居ることを、此の書のために、此の際に申上げることを許していたゞき度いと存じます。

昭和七年三月滿蒙新國家の建設せられる日

著者

を、忘れなかつたつもりです。

此の書の最初の版の序文の中に、私はこれを「成人の讀物としても無意義でないのみならず、從來は受驗準備書のみで、一般的讀物には、殆ど缺けて居たといつてもいゝ位な、此の方面の缺陷を、幾分は補ひ得るであらうとさへ、ひそかに信じて居るのです」といひましたが、事實、これはかなり教養ある成人に迎へられたことは、出版者や私への手紙で、知ることが出來ました。それは却て少年物としてではなくさへ、取扱はれました。私は特に少年のためにする序文を書きませんが、此の書を手にされたる方々は是非これを更に其の子女へおすゝめあらんことをお願ひします。

此の書は挿畫に於いても非常な注意を拂ひました。少年のための歴史書――日本史、西洋史――には、少しく挿畫を加へるものが、見えては來たやうですが、全く歴史に無理解な畫家の手すさびや、低級の製版で、事をたさうとして居る傾が少くないやうです。私は歴史教授に實物や參考資料（圖版の如きものでも）の提示を、常に主張するものでありますから、書物の上にもそれの忽にされるべきでないことを確信して居ります。此の點で恐らく出版界

の一新例を開いたともいへませう。それらはすべて、信憑するに足りる資料によりました。中には支那人の物の見方、考方などを示す方便として用ゐたものもあります。それからやゝ偏しすぎた程に、多くの美術殊に繪畫の寫眞を入れたのは、支那文化の精神の一解釋を、これによつて試み度いと思つた意向もあつたからです。

此の小著に「黄河の水」と名づけたのは、黄河は實に支那のシムボルであるともいへるからです。

黄土層に特色づけられた此の河の、長い廣い流域の變化にも似た支那の社會のすぎこしあと。その深い底にひそむ知られざる力にも比すべき、支那民族の内に包む力。その遠き遠き河源にも擬すべき、支那文化の淵源――。さういふ上から見て、支那歴史の題號に、此の名を選んだのであります。

私が最初の原稿に筆を染めてからの一日、尋常三年になる長女が「お父さんがお話の本をお書きになるなら、私が畫をかきませうか」といつたので、それも面白からうと、それをまか

せた。畫は支那の芝居人形で、歴史は芝居のやうであるといふ意味からのものです。題筌の文字も書かせました。見返しの畫は十年ばかり以前の私の旅行のスケッチからとつたもので、津浦線鐵橋附近の黄河です。

私は餘りに勝手に、自畫自讃の不遜の言葉を弄したかも存じません。然し此の書はとにかく新しい試として、心ある人々から迎へられたことは事實でした。今、尾高氏の好意によつて、改めて、公にすることとなつたのに當り、前版の不備と思つた點を修訂し、最近の史實を增補し、挿畫を改廢增加することゝしました。

然しまだ〳〵恐らく多くの缺點もありませう。足らざる所もありませう。大方の指示を蒙つて、少しでも完きものへと近づくことは、著者の心からの願ひであります。

昭和二年明治節、改版の成らうとする日

鳥山喜一

支那小史

黄河の水

目次

改版の言葉

改訂增補版を世に送るに當りて

此の書を手にされる方々へ

一 黄土を舞臺に（傳説の時代）

穴居の民……一

指南車……五

文字の發明……七

大洪水……一一
二天命の動き（夏殷の時代）
酒の罪……一六
象牙の箸……一九
三聖人と大盜（周の時代）
上手な釣人……二四
覇者の爭ひ……二九
聖人の出現……三三
强者の天下……三七
食客と學者……四二

四萬里の長城（秦の時代）
大皇帝……四六
萬里の長城……四九
虞美人草……五二
五沙漠をこえて（前漢の時代）
男まさりの皇后……五七
土產の葡萄……六〇
不老の神藥……六五
美人の嘆き……六八
飛行機の出現……七一

六 ローマへの道（後漢の時代）
佛陀の福音……七五
紙の發明……七九
ローマへの道……八二
襁褓皇帝……八六

七 北方の嵐（三國晉南北朝の時代）
水魚の交り……九二
竹林の七賢……九七
北方の嵐……一〇〇
索虜と島夷……一〇五
筆の力と信仰の熱……一〇九

八 太陽の輝き（隋と唐との時代）
大運河……一一七
日沒する處の天子……一二〇
民は國の本……一二四
老女の卽位……一二八
美人と惡將軍……一三三
太陽の輝き……一三八
兵士の我が儘……一四五
海東の盛國……一四九

九 論語の活用（五代と宋との時代）
纏足の始り……一五四

論語の活用……一五九
つむじ曲りの大臣……一六三
新文字の創作……一六八
耻の鐵像……一七二
畫筆の誇……一七六

一〇 蒙古風（元の時代）

少年酋長……一八三
惡魔の天降り……一八六
蒙古風……一八九
チパングの島……一九四
石の下にも若草……一九八

一一 新世界からの光（明の時代）

永樂錢……二〇三
南倭北虜……二〇七
皇帝の悲み……二一〇
キリスト教の福音……二一四

一二 眠れる獅子（清の時代）

辮髮の强制……二一〇
獅子の雄姿……二一三
四庫全書……二一七
阿片の禍……二二一
落第生の謀叛……二二五

弱い者いぢめのヨーロッパ……二三九
一寸の蟲にも五分の魂……二四四
秘密結社……二四七
黄龍旗を倒して……二五〇

一三 五色旗と青天白日旗（現在の支那）

看板のぬりかへ……二五六
霧中の微光……二六〇
國恥紀念日……二六五
青天白日旗……二七〇
雲間の白日……二七五
無智の勇氣……二八三
新五色旗……二八九

帝、震に出づ……三〇一
蘆溝橋の銃聲……三〇五
ちぎれ行く青天白日旗……三一六
結び……三二一

挿畫目次

(1) 陝西省に於ける黄土層と穴居の有様……二—三
(2) 山西省雁門關下の穴居……二—三
(3) 貝貨と蟻鼻錢……一〇—一一
(4) 殷代の牙角細工……一〇—一一
(5) 殷代の獸骨文字……一〇—一一
(6) 周代の銅器(尊)……一〇—一一
(7) 周代の銅器(敦)……一〇—一一
(8) 周の文王と諸王子……二六—二七
(9) 齊の桓公……二六—二七
(10) 老子と孔子……三六—三七
(11) 曲阜文廟の孔子像……三六—三七
(12) 古代支那の戰爭圖……四二—四三
(13) 秦王政と荊軻……四二—四三
(14) 春秋戰國時代の貨幣……四四—四五
(15) 現時の函谷關……四八—四九
(16) 秦代の詔版……四八—四九
(17) 陝西省咸陽縣城……五四—五五
(18) 陝西省長安の現景……五四—五五
(19) 敦煌玉門關址……六〇—六一
(20) タクラマカン沙漠……六〇—六一
(21) タクラマカン沙漠……六〇—六一
(22) 王莽時代の鏡……七二—七三
(23) 唐の海獸葡萄鏡……七二—七三
(24) 釋迦降誕の圖……七六—七七
(25) 漢代の木簡……八〇—八一
(26) 漢代の帛及び紙……八〇—八一

(27)(28) 漢時代の風俗……八四—八五
(29) 赤壁の景……九四—九五
(30) 諸葛孔明の祠……九四—九五
(31) 南京の石頭城……一〇二—一〇三
(32) 南京の莫愁湖……一〇二—一〇三
(33) 南京の鷄鳴寺……一〇二—一〇三
(34) 道教の神像……一〇八—一〇九
(35) 現代の道士……一〇八—一〇九
(36) 東晉の顧愷之筆女史箴圖卷……一一〇—一一一
(37) 山東省泰山經石峪の金剛經刻字……一一二—一一三
(38) 經石峪の刻字の拓本……一一二—一一三
(39) 東晉の王羲之の筆蹟……一一二—一一三
(40) 山西省雲崗石窟の露佛……一一四—一一五
(41) 唐の閻立本筆隋の煬帝の像……一二〇—一二一
(42) 江都の故址(楊州)附近の景……一二四—一二五
(43) 現代の大運河……一二四—一二五
(44) 唐の高宗の陵……一二八—一二九
(45) 驪山溫泉……一二八—一二九
(46) ゾロアストルの像……一四〇—一四一
(47) 廣東の回教寺院の內部……一四〇—一四一
(48) 唐の李眞筆不空金剛の像……一四〇—一四一
(49) 山西省天龍山石窟の唐代彫刻……一四二—一四三
(50) 河南省龍門奉先寺の石佛……一四二—一四三
(51) 唐の歐陽詢筆　虞恭公碑……一四二—一四三
(52) 唐の褚遂良筆　雁塔聖教序……一四二—一四三
(53) 唐の顏眞卿筆多寶塔碑……一四二—一四三
(54) 渤海國の佛像……一五〇—一五一
(55) 渤海國國都址の石燈籠……一五〇—一五一
(56) 渤海國國都址の宮殿址……一五〇—一五一
(57) 纏足せる支那婦人……一五八—一五九

(58) 纏足の靴……一五八—一五九
(59) 宋の故都(汴京)の遺址……一六〇—一六一
(60) 金の國都(會寧府)址の土城壁……一六〇—一六一
(61) 契丹文字……一七〇—一七一
(62) 女眞文字……一七〇—一七一
(63) 宋の徽宗筆鳩と桃花の圖……一七〇—一七一
(64) 浙江省杭州西湖の風景……一七二—一七三
(65) 西湖の大觀……一七二—一七三
(66) 西湖畔の岳飛の墓……一七四—一七五
(67) 岳飛墓前の秦檜夫妻の鐵像……一七四—一七五
(68) 宋の米友仁筆雲山圖卷……一七八—一七九
(69) 宋の梁楷筆踊り布袋の圖……一八〇—一八一
(70) 宋の馬遠筆雨中山水の圖……一八〇—一八一
(71) チンギス汗と其の四子……一八四—一八五
(72) 蒙古軍のバグダッド攻擊……一八四—一八五
(73) 宋の文天祥の像……一九〇—一九一
(74) 元の大都(北平)の土城址……一九〇—一九一
(75) マルコ・ポーロの像……一九六—一九七
(76) モンテ・コルヴィノ、元の世祖に謁する圖……一九六—一九七
(77) 支那の役者……二〇〇—二〇一
(78) 支那芝居の一場面……二〇〇—二〇一
(79) 敦煌莫高窟のラマ教聖句の石刻……二〇二—二〇三
(80) 元代の交鈔(紙幣)……二〇二—二〇三
(81) 明の十三陵の牌樓……二〇六—二〇七
(82) 明の十三陵の石象……二〇六—二〇七
(83) 河北省八達嶺附近の長城……二〇八—二〇九
(84) 豐臣秀吉に贈つた明の册書……二一〇—二一一
(85) 明の毅宗最後の地……二一〇—二一一
(86) 明の戴文進筆夏景山水圖……二一四—二一五

(87) 明の仇英筆宮廷風俗圖卷……二一六—二一七
(88) 明代の磁器……二一六—二一七
(89) 宋代の磁器……二一六—二一七
(90) 北平城外マテオ・リッチの墓……二一八—二一九
(91) 明の王太后のローマ法皇に送つた書翰……二一八—二一九
(92) 清の舊宮城前……二二〇—二二一
(93) 北支那路傍の辮髪師……二二二—二二三
(94) 阿片吸飲の圖……二二二—二二三
(95) 國立北平圖書館所藏の四庫全書の一册……二二八—二二九
(96) 北平觀象臺の觀測機器……二二八—二二九
(97) 清の惲南田筆山水圖卷……二三〇—二三一
(98) 郎世寧筆松鶴圖……二三〇—二三一
(99) 清乾隆時代の磁器……二二二—二二三
(100) 曾國藩……二二六—二二七
(101) 天王の詔書……二二六—二二七
(102) ドイツの膠州灣占領紀念碑……二四〇—二四一
(103) 青島の舊ドイツ總督官邸……二四〇—二四一
(104) 西太后……二四四—二四五
(105) 李鴻章……二四六—二四七
(106) 義和團匪の西洋人虐待……二四六—二四七
(107) 萬壽山離宮……二四八—二四九
(108) 同長廊……二四八—二四九
(109) 袁世凱像(銀貨)……二五四—二五五
(110) 孫文……二五四—二五五
(111) 吳佩孚……二六〇—二六一
(112) 張作霖……二六〇—二六一
(113) 曹　錕……二六二—二六三
(114) 閻錫山……二六二—二六三
(115) 五卅事件のポスター……二六八—二六九
(116) 同上女學生の示威運動……二六八—二六九
(117) 北平正陽門上の排日ポスター……二七〇—二七一
(118) 北平中山公園内の排日ポスター……二七〇—二七一
(119) 國民革命軍のポスター……二七二—二七三
(120) 國民革命軍の廣東出發……二七二—二七三
(121) 蔣介石と馮玉祥……二七四—二七五
(122) 滿洲事變に於ける日本軍司令官の布告文……二九三
(123) 宣統帝(現滿洲國皇帝)……三〇〇—三〇一
(124) 同　皇后……三〇〇—三〇一
(125) 滿洲國皇帝卽位慶祝のポスター……三〇二—三〇三
(126) 劫火あがる廣東市街……三一〇—三一一
(127) 戰火をさまる漢口市街……三一〇—三一一

別刷地圖目次

前漢の疆域……六二—六三
唐代アジヤ形勢圖……一三二—一三三
元代アジヤ形勢圖……一九四—一九五
清代アジヤ形勢圖……二二六—二二七

一　黄土を舞臺に

――傳說の時代――

穴居の民

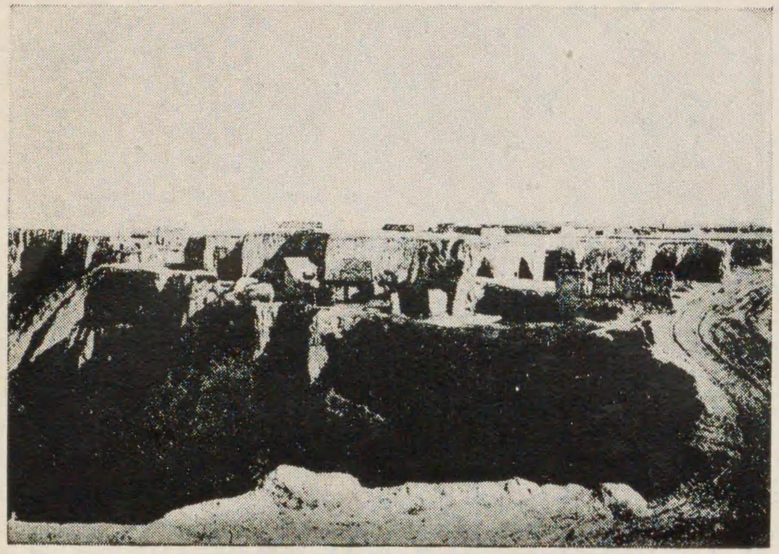
歷史はちようど芝居のやうなもので、その土地は舞臺、そこにいろ〳〵な活動をした人種は、役者にたとへることが出來ます。支那の歷史の舞臺は、後にはたいへんに廣くなりましたが、始めは黃河の流域のほんの一部分でした。また其の役者も、一番おもい役をしたものは、漢民族であつたといへます。それは日本の歷史の大立物が、大和民族であるやうなものです。

此の漢民族が何處から來たかといふことは、明かには分つて居ませんが、黄河の上流の地方から、だん〳〵東へ東へと移つて來て、その中流域に生活をするやうになつたのだらうと、いふことだけはいへるのです。そこで大昔の漢民族は、まだ一つのまとまつた大國をつくるといふこともなく、あつちこつちに小さい部落を作り、獵をしたり、家畜を飼つて居たのです。それから農業をやり、次第次第に文明に進んで來ました。その家といふのも、北支那の地理的特色である、黄土層の切れ目の崖を掘つて、それに住んだと思はれますから、其の生活の様子も、大よそ推察が出來ませう。かういふ穴居は、何千年後の今日でもなほ、陝西省、山西省、河南省などには現存してゐます。第1・2圖は其の一例です。かういふ黄土層

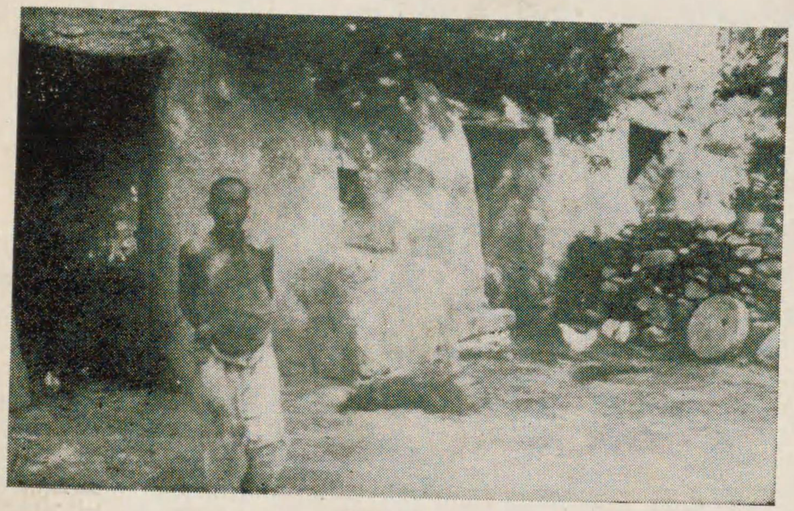
(1) 陝西省内の黄土層の有様を示したもの。

かういふ黄土層の斷れ目を利用して、下層の者は穴住居を作つてゐます。

(2) 山西省雁門關(長城の一關門)南麓の穴居。穴居といつても、狐や狸の穴とは違つて、黄土層の斷崖につけた戸口を入ると、中は普通の家のやうに一方に通路(廊下)をとり、部屋は二間なり三間なりに區切られてゐます。天井も床も壁もそれらしくちやんと作られてゐるのです。また其の入口には、腰障子なり板戸なりがありそれに「福」「壽」などの紅紙の張つてあることも、他の民家と同樣です。お隣との境も石を積んで作つたのもあり、しやれたのは門もあります。草花も咲き、鷄や犬も飼はれてゐます。



(1) 陝西省に於ける黄土層と穴居の有樣



(2) 山西省雁門關下の穴居

といふのは、大昔も大昔、まだ人類の生活も始らなかつた地質年代に、いまの中央アジヤ方面の沙漠から、吹き送られた細い〳〵沙が、北支那に積り積つて出來上つた地層なのです。これは肥沃な耕地ともなります。漢民族が早く農業の民となつたのは、此のおかげです。またよく斷崖となつて、要害の地形をも作つてゐます。

こんな有樣の漢民族がだん〳〵に、其の文明を高めて行つた次第を、支那の古い云ひ傳へでは、えらい聖人たちが出て、教へ導いてくれたものとして居ります。有巢氏が出て、穴居その他の衞生上よくない、住居をして居るものに、家をつくることを教へたとか、燧人氏は、まだ火といふものを知らなかつた民に、初めて火をおこすことを教へ、食物を煮たり燒いたりする法を傳へたとかいふのが、

その一例です。煮たり燒いたりして、はじめて料理といへるのであるから、支那人は日本の御馳走に、なくてならないお刺身のやうなものは、野蠻時代のもので、料理の數には、はいらないと申します。これはわき道へ外れましたが、そんなふうに、料理法も覺えて來たのです。また伏犧氏といふのは、家畜を保護することや、いろ〳〵な禮式のことも教へたといふし、神農氏は其の名からして、農業に緣あるやうに、農作のことはいふまでもなく、商業や醫藥のことをも教へて、人々の生活を豐にし、幸福を增してくれたといふことです。この中で燧人氏、伏犧氏、神農氏を、三皇といふ總稱でつたへて居ります。

指南車

かういふ云ひ傳へのあとに出て、初めて當時の支那を、統一したと傳へられるのが、黄帝であります。黄帝は三皇につぐ五帝――徳のすぐれた、天子とも聖人ともいふべき、五人をひつくるめて呼ぶ名稱――の第一の人です。

漢民族が黄河の流域に來た頃には、それよりも前に苗族といふのが住んで居て、爭も起つたらしいのですが、だん〳〵さういふものを敗かして、南方におつぱらひました。黄帝はさういふ仕事をしとげて、漢民族の部落を、一まとめの大きいものに作り上げた、天子として傳へられて居るのです。此の統一は、今からは四千年も前のことだと申します。昔話には黄帝のかういふ事業に、抵抗し

た相手の一人に、蚩尤といふ怪物が居て、頭は銅で額は鐵、おまけに四目六手といふのですから、恐ろしいものです。これが戰になると、雲や霧を起して黄帝を苦しめる。方角が分らないので、黄帝の方は、たび〳〵弱りましたが、帝もさるもの、つひに指南車を發明して、どんなひどい雲や霧につゝまれても、すぐそれによつて方向を知ることが出來たといふことです。この指南車は今の磁石と同じもので、支那ではこんな大昔から、之れを使つて居たといふ學者もありますが、然し指南車と磁石とは、同じものでは御座いません。

それはさておき、黄帝の頃には、宮室も營まれ、役所の制度も整へられ、文字も出來れば暦も作られ、また黄土層の惠で農業も發達し、養蠶も始められたといはれるし、舟も車も、その他日用の器具器械の發明もあつたと傳へられます。つまりこれはだん〳〵に、漢民族の生活が高められ、政治も整つて來たことを、偉い人物の事業功績に托して、話されてゐるのです。

文字の發明

かゝる文明の進みの中で、最も大切なのは文字――私共のいふ漢字――の發明です。それは蒼頡といふ人が、鳥獸の足あとを見て、つくつたといふのですが、これも一人の仕事ではなく、何代も何代もの間に自然に發達し、ひろく行はれて來たのを、かういふ偉人の發明として、分りいゝやうに傳へて居るのでせう。

漢字の組立と使ひ方には、六通りあつて、それを六書といひます。

象形　日月動植物器具など、その形をうつした繪文字です。字引の扁や冠になつてゐるのは、多くはこの種類のものです。之れが一番最初の形でせう。

指事　ある事物を指し示す字です。一二三もこれです。上(⊥、⊥)下(⊤、T)の如き、一定の位置を示す一の上下にしるしをつけて、その上か下かを明かにしたやうな文字はこれです。

形聲　一方はその文字のもつ意味と、一方はその發音を示す文字との、二つの文字の組合はせの字。同じ魚でもいろ〳〵あるから、魚に里、周、付などをつけて、鯉、鯛、鮒などと區別する類です。

會意　二つ以上の文字を組合はせて、一つの新しい意味のある文字をつくるのです。木が多く立ち並んで居るので林とか、日が地平線上に上つて來た意味で、旦をつくるとかゞこの例。

轉注　これと次の假借とは、使用法から來た分類のものです。轉注は本來の字の意味を引きのばして、似よつたものに應用したものです。たとへば金は金屬の總名ですが、それから金屬の中では一ばん貴い黄金にも、金屬で作つた武器にも、貨幣の意味にもなるのがこの例です。

假借　これは物の音とか、鳥獸の聲をうつすやうな場合に、用ひられるもので、其の文字の本來の意味とは關係なく、たゞその音が意味を有するのです。木をきる音に「丁々」、車が「轔々」などいふのは、この例です。

の六つがそれであります。

かういふ文字を見ると、それによつて、昔の支那の社會の有樣などを、考へる上のいゝ參考になりますから、少し説明しておきませう。繪文字の象形には、山は、日は、月は、目は（目はこれがたてになつたのです）馬は

ものもあります。また其の形で第一に目につく所をとつて、例へば牛を（この二つは角を主として顔をとつたのでせう）羊を子を（子供の頭部の大きいところをかまへて作つたもの）の如きもあります。女は人が跪いて居る形にしてあります。これは女は男に從ふべきものといふことを、意味してゐるので、大昔の支那では、男女同權などといふことは、考へられても居なかつたのです。それから母（この字は指事です）は女に乳房を、はつきりつけて、おかあさんといふことをあらはして居ます。會意で一つの例をとりますと、男は田（田地）と（これは農具の形ですが、それで力とか勞働とかの意味をもつ、力といふ字になるのです）との組み合はせです。男は田に出て勞働するものとされて居たことが分ります。父は手（）に棒（）は指揮とか支配とかの意味を

示して居ます)を持つて、家を支配することを示して居ます。

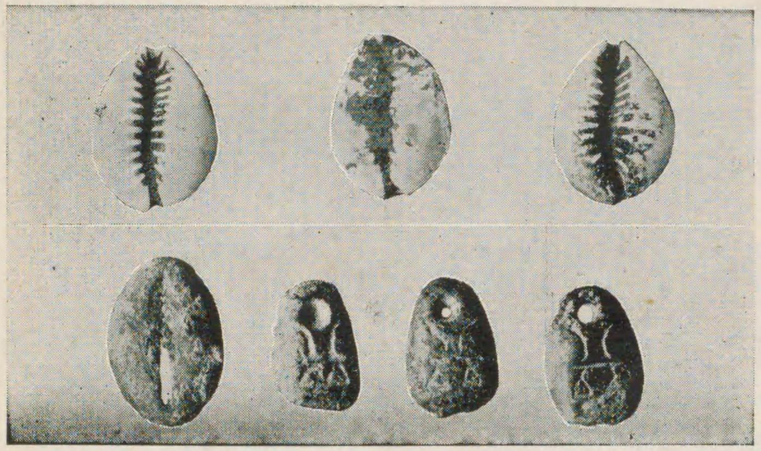
それから皆さんのよく御存知の字の一つをいひますと、貝があります。昔、支那で貝(子安貝、寶貝)を貨幣としたことは、實物が殘つて居るので明かです(第3圖參照。)貝の字は此の子安貝の形に象られ、 などいろ〳〵に書きますが、そこで貝といふ部分を含む字は、財産に關係のあるものとなります。次にいふのは主として形聲の字ですが、財、資、貸、賃みんなそれです。貝はおかねですから、貝を分けると貧になるのです。なほ貝は禮物としても使用されました。賞、賜、寶などはこの例です。漢字をかういふやうにして見ると、なかなか面白いことがあります。

なほ古い時代の文字は、どんな形をしてゐたかと申しますと、今

(3)上の三個は子安貝の貝貨。之れが財寶とされたのです。これに象つて銅で作つた貨幣が左下の一つ。他の三つは蟻鼻錢といふ銅貨。之れから後にいふ圓錢が出來たともいはれます。

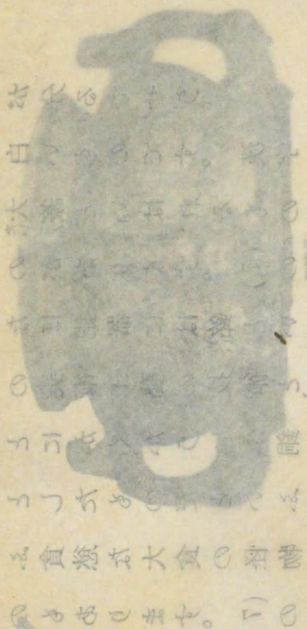
(4)殷時代の獸角や獸骨の細工物で、(5)の文字を刻した獸骨などと一所に、殷の舊地(河南省安陽縣)附近から發掘されます。(4)の右は犀の角で作つた器物の破片。その彫刻の意匠など、次に示す銅器のそれとよく似てゐます。左は婦人の簪です。又象牙の細工物なども出たことがあります。かういふ細工物の出たことは、殷の紂王が象牙の箸を作らせたなどいふ話を、思ひ出させます。

(5)之れは前と同じく殷の舊地から掘り出された獸骨です。こゝに刻まれてる文字は、現存してる漢字の一番古い形といふことです。かういふ文字は獸骨ばかりでなく、龜の甲に彫られたのも出ます。之れはすべてトに使つたもので、其の法はトふべき事がらを、表面に彫りつけ、裏に火をおくと其の熱で表にひゞが出來ます。其のひゞの工合で吉凶を判じたのださうです。

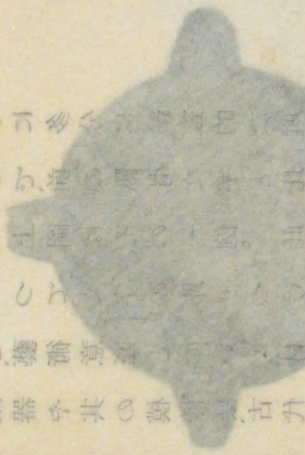


(3)貝貨と蟻鼻錢

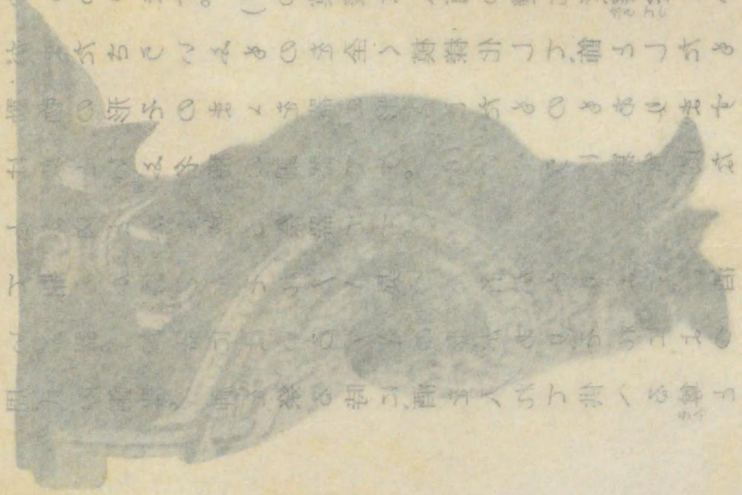
(4)殷代の牙角細工　　(5)殷代の獸骨文字



(一) 銅鼎（表）



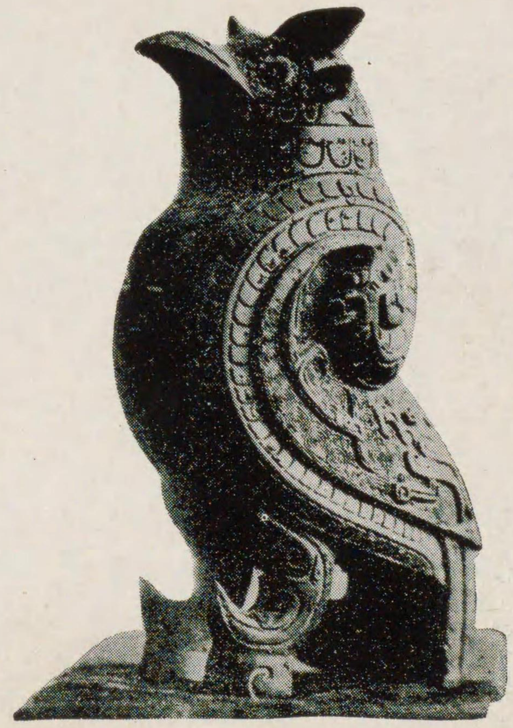
(二) 同（裏）



(三) 同（側面）

(6)周代の銅器。神を祭る時に、酒を入れて供へる尊といふ器。銅器にはいろ〳〵の形があり、それによつて鼎とか爵とか、それ〴〵異つた名があります。酒とか肉とかを盛る祭器です。

(7)は敦といふ名稱の銅器です。(6)のやうに寫實的な動物の形そのまゝを、器の形としたものもありますが、またさういふものを全く模様化して、飾としたものもあります。(7)の模様は人面の變化で、饕餮といふ貪慾な大食の怪物に象つたもので、暴飲暴食の戒としたものだといふ説もあります。此の説き方はとにかく、かういふ銅器や其の模様は、古代の漢民族の美術工藝の技術と、藝術意匠とのいゝ材料です。なほ銅器には銘といつて、文字の彫りつけられたものがあります。(7)の上圖はその一例。此の書體は大篆といはれるもので、前の獸骨文字と比較して面白いものです。漢字に多分に繪畫的な所があるのが分るでせう。



(6)周代の銅器(尊)

(7)周代の銅器(敦)

の楷書その他とは、かなり違つてゐます。一番古いと思はれるのは、殷時代のものと云はれる、龜甲、獸骨などに彫りつけられた字で、挿畫第5圖は其の一例です。それから第7圖に示したやうな、銅器に刻まれたものは大篆といはれて、複雜な字劃が多く、またなかなか美術的なものです。

大洪水

黃帝の後に出て、やはり五帝の中に數へられる堯と舜とは、後世の支那人が仰いで聖人とし、人君の模範とたゝへて居る天子です。一口に堯舜の世といへば、理想的な太平な世を意味することゝもなり、それだけ何事も理想的な飾りつけがされて居ります。堯帝

はまことに儉約に身を保ち、たゞ〳〵人民の安樂な生活を心がけられたといひ傳へられてゐます。太陽や水といふものゝお蔭は、誰も蒙らないものはないが、それは餘りに大きいので、みんなが見のがしがちであるやうに、此の天子のありがたい政で、天下太平になり、萬民は平和な暮しをすることが出來たが、それを天子の功德だとは感じなかつたほど、大きい惠を民にかけたといふことです。それで人民はひもじい思をすることもなく、

日が出りゃ働き　暮れゝばねむる
井ほりゃ水湧き　田を耕きゃみのる
天子のお蔭が何あらう

と節おもしろく地面をたゝいて、うたふことも出來ました。

初め堯は、親孝行で名高い舜といふ人が居ることを聞いて、さういふ人に政治を委かせたら、なほよく治るだらうと、之れを召して大臣にしました。舜は百姓の子でしたが、堯をたすけてよく政治をとり、遂に堯から天子の位をゆづられました。かういふ風にいい政が出來れば、百姓の子でも天子になれるといふことは、支那の國が我が國とは全く違つて居る、一つの大切なところです。

さて舜は地方の政治に注意しますし、また漢民族に抵抗する苗族なども征伐しました。殊にこの時には、音樂が盛になつたといふことですが、舜の作つたといふ歌なども傳へられ、その一つは今の中華民國の國歌にもなつて居ります。

此の堯舜の御代を通じて、一つの難儀は、黄河その他の河の大洪

水でありました。堯は初め鯀といふ人に命じて、之れを治めさせましたが、うまく行かない(後に鯀は刑罰を受けました)。そこで鯀の子の禹にやらせました。禹は八年間も我が身を忘れて、この天下を苦めて居る大水を治めることに努力し、その間は我が家の前をすぎても、立ちよらうともせず、職務第一につとめたといはれて居ます。さま〴〵の苦心で、つひにさしもの洪水をすつかり治め、民の患を救ふことが出來ました。舜はかういふ禹の功勞を見て、堯と同じやうに、我が子のあつたにもかゝはらず、禹に天子の位をゆづりました。それでこの罪人の子ともいふべき禹は、舜から位を受けて、天子となりました。萬民をそのひどい苦から救ひ、その生活を安樂にしてやつたから、人民の感謝を受けることゝなつたのは當然ですが、其の人望の最も多い者は、天の心にかなふ人であるから、天子となれるとする所に支那の特色があります。かく堯が舜に、舜が禹に、平和に王位をゆづつたことを、支那の歴史では禪讓といひます。

二　天命の動き

――夏殷の時代――

酒の罪

天子の位をゆづられた禹は、王を稱し國の名を夏とつけました。これは支那で、國の名をつけた始だといはれて居ます。禹は後に質素儉約の神様のやうにあがめられますが、その政治の上にも、日の行の上にも、常に勤儉力行の主義を實現して居ました。此のとき、始めて大變にいゝ酒を造つた人があつて、禹王に献上しました。王は之れを飲んで見て、「之れは甘い」とほめは致しましたが、「いまにこれで國を亡す者が出て來るだらう」といつて、其の發明をした人を斥けたといふ話も、傳へられて居ます。

禹王もまた前のやうに、天下で最も人望ある賢臣を選んで、其の位をゆづらうとしましたが、人民は王子の啓こそ、私どものほんとうの王様ですといつて、きゝませんので、つひに啓が王位をうけました。さうして子孫が相ついで王となり、四百年ばかりつゞきました。かういふえらい王の子孫にも、永い年月の間には、いろいろな人が出ましたが、最後の桀王になつて、一騒動が起りました。桀王は大變ぜいたくな人で、人民からの税を重くして、立派な御殿をつくつたり、日夜宴會にふける。肉で山を作り、酒の池をほつてそれに船を浮べ、三千人もの家來を集め、一令の下に牛みたいに、それ

をガブ〳〵飲ませて喜ぶといふやうな、馬鹿なことをして遊びました。これでは政がよく治るはずはありません。

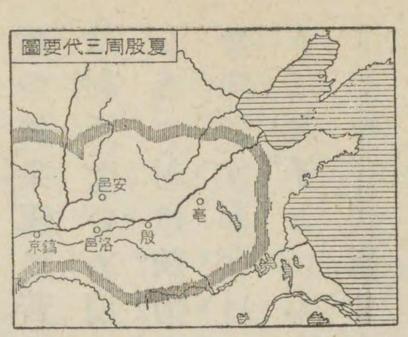
支那では古くから王の他に、多くの大名があつて、それ〴〵土地をもち、そこの人民を支配して居ました。王はさういふ諸大名の總支配者ともいふべきものでしたが、この桀のやうな王では、そのしめくゝりは出來ません。ところがその大名の中で、一番人望のあつた湯王といふのが、桀王の如き亂暴者は天子ではない、そんな者は攻め殺しても差支へないといつて、兵を出して之れと戰ひ、その位を奪つてしまひました。禹王が心配した酒の害は、彼の子孫にまづあらはれたのでした。

この湯王が立てた國は商(後に殷)と申します。

象牙の箸

殷の國は六百年もつゞいたといはれます。初め湯王は善政を行つて、桀王に苦められた人民の難儀を救ひましたが、その子孫には紂王といふ、前の桀王と並んで、暴君のお手本となつた王が出ました。紂は腕力もあり智惠もありまして、決して低能ではなかつたのですが、ぜいたくが好きで人民を苦めたのです。その時の賢人で箕子といふ人は、王が象牙の箸を作つたのを見て、この調子ではその奢は極まる所なく、國を滅すことゝなるだらうと嘆きました。が不幸にしてその通りに、紂王はだん〴〵わるい事をやり出しました。妲妃といふ美人を愛して、その言葉は何でもきゝ、稅は

重くする、宮殿は美しく飾り立てる、晝も夜として大宴會を催すといふ有様。また罪人には酷い刑罰を行ひ、火焙りなどをして喜びました。それで人民の苦を見かねた大名の一人の周の武王は、つひに武力を以て、之れを攻め滅して、王位を奪ひました。この事件は、西洋紀元前一一二二年（神武天皇即位前四六二年）のことゝ傳へて居りますから、支那の歴史がいかに古く、その文化のいかに古かつたかも、察することが出來ませう。なほ古傳説によれば、夏、殷、周の中心地は略圖に示したやうに、黄河の南北わづかの部分でした。



都の夏＝（山西省夏縣）邑安
都のめ初の殷＝（河南省商邱縣）亳
都の後の殷＝（河南省偃師縣）殷
都のめ初の周＝（陝西省長安縣）京鎬
都の後の周＝（河南省洛陽縣）邑洛

さて商（殷）の湯王が夏の桀王を、周の武王が殷の紂王を、武力を以て倒して、新しい國を建てたことを、支那の歴史では放伐といひます。支那人の考へでは、天下を治めるのは天であるが、然し天は手も口もないから、天のやうな、情ぶかくて公平な心をもつ人に、その命即ち天命を傳へて代理をさせる。天子といふのは文字の通り、天の子といふことです。さうしてこの天の子として、その父即ち天の命を受けるといふことは、人望の最もあつくなつたことで、知られると信じて居たのです。だからいつでも、一番よく天の心にかなふやうな政をする人は、たとひ百姓の子であつても、また罪人の子であつても、舜や禹のやうに、天命が下つて天子になれる。それで堯が舜に、舜が禹に位をゆづつたのは、堯、舜の勝手な心からで

なく、天命が舜や禹に下つたと信ぜられたからです。又たとひ親から其の位をゆづられても、人民をいぢめ亂暴をして、天の心にそむくやうなものは、もはや天子のねうちがないものとして、この桀や紂のやうに、攻め滅されても仕方がなく、又そんな者は殺しても いゝといふのが、漢民族の考へ方なのです。かく天命が革ることを、革命といふのです。

かういふやうに、平和な手段ばかりでなく、武力でもつても、王位を奪ふことを承認するので、天命を看板に、王位をねらふ者の現はれたのも當然で、支那史に王朝の興亡の、たび〳〵見られる原因はそこに存します。我が日本のやうに、國の出來た始めから君臣の分が定まつて居て、萬世一系の天皇がいつまでも國をお治めになるのとは、全く國體の違ふものであるといふことを、よく理解して置かなければなりません。

三　聖人と大盜

――周の時代――

上手な釣人

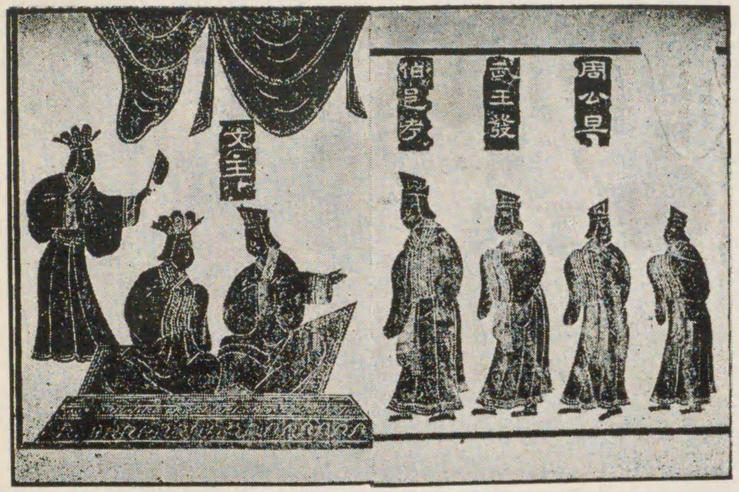
殷を滅した武王(姓は姬、名は發)は、都を鎬京(陝西省長安縣)にさだめました。この周の國は、武王の父の文王の時に、勢力が出來たのですが、それは太公望といふ賢臣の輔によるところ大でありました。文王が或る日の獵に、卜をしたところ、今日の獲物は「龍でもなく熊でもなく虎でもなく羆でもない。獲る所は覇王の輔」と出ました。當時の天子や大名は、獵その他のことをするとき、よく卜でもつて、その吉凶をうかゞつたものです。(さういふ卜に使つた龜甲や獸骨は、今なほ殷のときの實物が殘されて居ます(第5圖參照。)。さて文王は獵に出たところ、渭水といふ川の岸で、一人の老人が釣をして居るのを見つけました。話をして見ると、大變えらい人物であることがわかつたので、「貴公こそかねて私の先君がさがし求められて居た方である」といつて、太公望と名づけ、之れを大臣にしました。太公望は呂尙といふのがその本名で、山東省から流れ〳〵て、この周の領内へ來て、毎日釣をして居たのですが、一向に釣れない。「おぢいさん、毎日〳〵何を釣るつもりです」と聞くものがあれば、「をれは魚なんぞは釣らないよ」とばかり、相手にもしませんでしたが、こゝに太公望もまた望の獲物を得て、文王に仕へることゝなりました。(釣をする人の

ことを太公望といふのはこの事から起つたといふことです。

武王もこの大臣の輔によつて民心を得、遂に殷に代つたのです。二代目の成王は、まだ子供であつたから、叔父の周公旦といふ人が、摂政となつて政を行ひ、後世の模範となる制度も作られました。漢民族は血統を重んじ、祖先の祭を絶やさぬことを貴び、孝を以て百行の本としましたが、さういふことに伴ふ禮制なども整へられました。また人民の生活の安定のためには、土地を國有として、井田法を行ひました。此の法は九百畝の田地を九等分し（その區劃をする溝が井の字になるので此の名があります）周圍の地を八家に貸與へ、其の收穫で生活させ、中央は公田として八家が共同耕作をして、其の收穫は官に納めるしくみでした。この成王から次の康王にかけては、周の全盛時代で天下太

(8)周の文王と王后とに、諸王子が御機嫌伺ひをしてゐる圖。後漢時代の石刻の浮彫から。古代の支那では婦人は貞操を第一の美徳とし嫉妬は最悪のものとして禁ぜられてゐました。文王の后はかゝる婦徳高き婦人のお手本とされ、其の家庭がよく治り、いゝ王子達が澤山あつたことで、古い詩にも歌はれて居ます。王子の二番目は武王、三番目は周公旦です。文王や王后が坐つてゐる點は注意しておかれたいところで、支那では古い時には、まだ椅子や卓子を用ゐる風俗がなかつたことを示してゐるものです。後の(25)(26)をも御參考のこと。

(9)春秋時代の覇者の一人の齊の桓公を、魯の將軍の曹沫といふものが、おどかして居る圖です。齊は魯と戰つてたびたび勝ちましたので、媾和會議が開かれ、魯は齊に土地をゆづることゝなりました。ところがその席上で曹沫は桓公をおびやかして、その土地をとり戻したのです。圖に曹子とあるのは曹沫です。此の圖も後漢時代の浮彫によつたものです。



(8)周の文王と諸王子

(9)齊の桓公

平、わるい事をする者もないので、刑罰はあつても、之れを行ふことがなかつたと傳へられて居ます。

けれども盛衰は何事にも免れ得ません。さしも太平をよろこんだ周も、十代目の幽王になつて、大いに變化を見ることゝなりました。周が國を建てた頃には、北方からも西方からも、野蠻人の侵入がありましたが、之れをよくをさへつけて居ました。さうして又かういふものに備へるための、いろ〳〵の設備もありました。幽王はその愛して居た妃の一人が、一向、笑顔を見せてくれないので、どうかして之れを笑はせたいと思つて、一策を案じたのが、野蠻人侵入の警報でした。外民族が侵入して來たときは、烽火をあげてあひづをすることになつて居たので、早速それをやらせました。

諸大名は「すは國の一大事」と、取るものもとりあへず、都へ馳せ上つた。都は何處を風が吹くかといふ靜さ。勢こんだ面々は鳶に油揚をさらはれたよりも、もつと間の抜けた樣子をしたことでせう。これを高殿から見て、その妃は始めて笑つたので、王樣は喜びました。がをさまらないのは、諸大名の胸中でした。こんな馬鹿げたことをした國王でしたから、間もなく北方から侵入して來た犬戎といふ野蠻人に、攻め殺されてしまひました。それで次の平王は、今までの都を保つことも出來ず、危險であるからといふので、東の洛邑（河南省洛陽縣。後世の洛陽と同地。）に都を遷しました。これは西洋紀元前七七〇年（神武天皇即位前一一〇年）のことです。

覇者の爭ひ

支那の歷史では、此の平王が東へ都を遷してから後、ざつと三百年ばかりの間を、春秋の世といひます。此の間の事のあらましは、聖人としてよく知られてゐる、孔子が書かれた「春秋」といふ歷史の本にあるので、かういふ名がついて居るのです。

此の時代は北からは野蠻人が攻めて來る。周の天子は全く勢力がなくなつて、漢民族を救ふことが出來ない。そこで有力な大名達が、一方には周の王樣を尊んで、諸大名に忠實を誓はせ、外は此の侵入者を擊ち退けるために、立つことゝなりました。かういふ強い大名を覇者といひます。

その最初に立つたのが、今の山東半島地方を支配した齊の國の

桓公で、管仲といふ賢臣の輔を得て、覇業を遂げました。この管仲は、小さい時ひどい貧乏でしたが、同じ貧乏友達の鮑叔牙と、仲よく商賣などをしてゐました。後にその叔牙にすゝめられて、桓公の臣となり、つひには大臣になつたのですが、その貧しいときの友人の交りを、いつまでもかへなかつたといふので、美談として傳へられて居ます。（この「管鮑の交」のことを、後に唐の杜甫といふ詩人が、「貧交行」といふ詩に讃美しました。）

また覇者にならうとした人の中に、宋の國（河南省の南部）の襄公がゐます。南方の楚の國と、泓水といふ川のほとりで戰つたとき、敵が川を渡つて進んで來たのを、家來が、いま攻めれば勝ちますといつたが、「いや君子の戰は堂々とやる、敵が困つて居るところにつけこむ法はない」といつて、敵兵の川を渡るまで待つて、「さあ討て」と命令を下しましたが、時はすでに遲く、大敗北をしてしまつたといふ話を殘して居ます。これから「宋襄の仁」といつて、情をかけないでもいゝものに情をかけて、却つて馬鹿を見ることをいふ言葉が出來ました。

この他晉（晉は山西省に都がありました）の文公、楚（楚は湖北省に都がありました）の莊王といふ人も現はれましたし、西方には秦（秦は陝西省に都がありました）の穆公、更に東南には吳（江蘇省方面）と越（浙江省方面）とがありました。吳と越とは久しい間、たがひに戰つて居ましたが、越にまけた吳王の夫差は、父の仇國の敵と、夜は薪の上にねて、その恨を忘れぬといふ勢で、つひに越を攻めて、その王勾踐を會稽山に降參させた。吳は勝つて心ゆるみ、越は復讐を謀り、ついで越が勝つて、會稽の恥をそゝいだといふ物語もあります。

こんな工合に戰爭が、あつちにもこつちにも、繰返されて居まし

たが、いかに國をひろめた大名にしても、戰爭は決して幸福なことばかりを伴ひません。從つてそんなことはやめて、お互が平和にしようではないかといふ平和會議――その當時の語では弭兵會――が、開かれたこともありましたが、一方には慾心が出て來て、すぐ戰爭になつてしまひました。こんな工合で、弱い者は強い者に、その國を削られ滅されて來ましたが、またその強い大名の家では、家老に權力がうつり、晉の國の如きは滅されて、三人の家老が、その領土を分割して韓、魏、趙の三國を建てました。この三つの新しい國が自立した西洋紀元前四五三年を以て、春秋時代の終り、次の戰國時代の始めと致します。さうして弱肉强食の傾向が、一層露骨になつて來た時代が始まるのです。

聖人の出現

かういふ力の世の中に、一方には道を說いて、天下を平和に治めさせようとする、聖人が現はれました。それは孔子です。孔子は名を丘といひ、今から二千四百年も昔に、魯の國（今の山東省中部にありました國）の曲阜といふ所で生れました。小さい時から他の子供とは違つて、すぐれた德をもつて居ましたが、大きくなつては、支那の青年のすべての志すやうに、まづ役人となりました。それはほんの小役人ではありましたが、よく其の職をつくして、人々から心服されたといふことです。然し孔子は世の亂れをどうにかして治め、人民をその苦から救つてやり度いといふ、ほんとうの政治家の尊い心をもつて

居ましたから、其の理想とする堯、舜や周公旦のやつた、道德を基とする政治を實行し、周の天子を昔のやうな尊嚴のものにし、禮儀にかなふ世の中にしようと努力しました。それで方々の國々に出かけて行つて、大名や大臣にそれを說きましたが、何分にも腕づくの時代ですから、孔子のいふやうな、道德で國を治めるなどといふことには應じてくれる人はありません。そこで故鄕に歸つて、前からつき從つて來た弟子等に、道を說き學を敎へて、七十四でその一生を終つたのです。この學問が後に儒學といはれるものです。

孔子といへば、きうくつな修身の先生と考へ、その言行を記した論語といふ本は、あくびの出るお談議のやうに思ふ人もあるさうですが、それは大まちがひです。孔子は一人一人がその心を修めて行く心もちを以て、家をも國をも天下をも治めようといふ、政治を說いた人です。そのいふことは、決して二十世紀の今日の青少年の心に、あてはまらないやうなものではありません。澤山の眞理をいつて居る聖人の言葉は、決して死ぬものではないからです。皆さんは「論語よみの論語しらず」といふ諺を御存知でせう。私は「論語よみの論語しらずはうらやまし、論語よまずの論語しらずは」といふ歌のあることを申して、皆さんに論語もお讀みなさいと、おすゝめ致します。

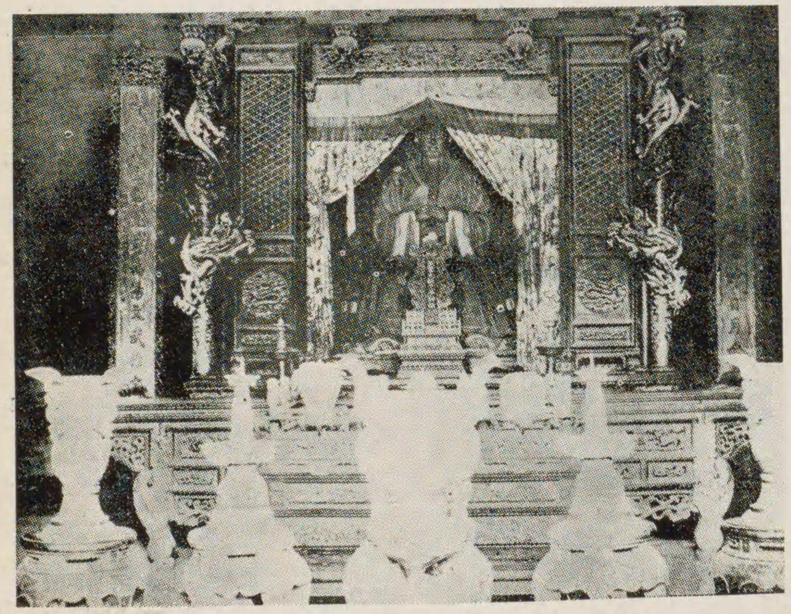
この孔子の生れたよりも少し先に、やはりえらい學者で、老子といふ人が出ました。ある云ひ傳へでは、この人はおかあさんのお腹の中に、何十年も居たから、生れた時には、もうおぢいさんであつ

たので、老子といふんだなどとも申します。此の人も同じく天下の大亂を治めることについて、また人々の修養のことについて、貴い言葉をのこしました。然しそれは孔子が道徳的な、いろ〳〵な箇條でもつて、世を治めて行かうとするのとは反對に、何にもかれこれいはず、自然に任せておけば、天下が治るものだと主張しました。早い話が、凸坊と茶目とが喧嘩をしてゐるとすれば、「や、あぶない」の「喧嘩はわるいことだの」といつたつて、なか〳〵やめはしない。はうつておけば自然にやめて、却て仲がよくなることもあります。そこの心持ちを大いに説いたのです。老子のいつた言葉は、大へんに意味も深く、むづかしいものですが、その一例を手つとり早くいへば、こんな風なのです。この老子は生れたことに、不思議な話

(10) 老子と孔子。之れは孔子が老子に「禮」を教はつたといふ傳說を描いたものです。後漢時代の石刻の浮彫からとりました。鳥を持つてるのが孔子。お弟子入の挨拶に雉を贈るところです。

(11) 山東省曲阜孔子廟大成殿の孔子像。昔の魯の國の都に當る山東省曲阜に、孔子を祀ることは漢に始りましたが、現時の壯大な建物は清朝初期のものといはれて居ます。其の孔子廟の正殿ともいふべきものは大成殿で、其の大成殿正面に安置されてるのが、此の孔子像です。像は帝王の衣冠を着した偉容で、何人も莊嚴の氣に打たれます。前面の器物は祭器。曲阜は孔子の故鄉ですが、此の廟の他に墓所もあり、子孫はなほ連綿として存し、衍聖公といふ尊稱を受けて、此處に住み祖先の祀に奉仕してゐます。今の當主はなほ十餘歲の少年です。

(10) 老子と孔子



(11) 曲阜文廟の孔子像

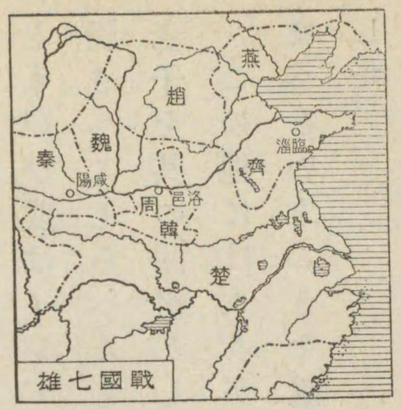
があるやうに、死んだことも一の神秘で、支那の歴史では西の方に去つて、終る所を知らずといつてあります。それで仙人になつたともいひ、或はインドに入つて、お釋迦様になつたのだなどといふ説さへ、こしらへたものがあります。後に道教といふ教では、此の老子を其の開祖として、崇めることゝしました。

この他には、人々が相愛して、戰爭などを、此の世からなくしてしまへといふことを説き、非戰論を主張した墨子といふ人もありました。

强者の天下

前にいつたやうに、小さい弱いものは敗けて國をとられ、春秋の

終には、強大な國が七つとなり、所謂戰國の七雄が、相對抗することとなつたのです。その七雄とは、秦、趙、魏、韓、燕、齊、楚です。周の天子は、上に立つことにはなつて居りましたが、もう飾り物だけのねうちもなく、天下はこの七國の腕力次第で、風も起れば雨ともなりました。それでこの時代はその名の如く、戰爭が烈しく戰はれました。七雄といふのも、つまりは天下をねらふ大盜なのです。



中でも秦は一番つよく、他の六國は一國だけでは、とてもこれに勝てません。それで六國の同盟――合從といひました――を計畫して、秦をやつゝけようとする人が、出て來ました。これは蘇秦といふもので、巧みな辯舌で、だん〳〵六國を說き伏せて同盟させ、自らはその大宰相となつて威を振ひました。然し六國同士はお互に利害關係があるから、仲間割れのしやすいのは當然ですし、また秦はその同盟の邪魔をして、自國の安全を謀りました。それに同盟軍は秦を攻めて、函谷關で大敗し、韓と趙とは秦に攻められて、八萬人からも殺されたこともありましたので、同盟は永續きが出來ませんでした。之れを見て張儀といふ者は、六國に秦の強いこと、秦にはとうてい勝ちにくいから、之れと平和に、結びつくことの利を說いて、連衡の策に成功しました。初めこの張儀は辯論の術を學んだが、志を得ないで、ぐづ〳〵して居たある日のこと、細君と喧嘩をした。すると張儀は、いきなり口をあけ

て見せて「オイ、おれの舌はまだあるか」ときいた。細君は妙な顔をして「何ですね、舌がなければ、口がきけないぢやありませんか」といふと、「よし。この三寸の舌さへあれば……」といつて、家をとび出したが、とう〳〵この大業をしとげたといふことです。

合從が破れ、連衡は出來ましたが、秦は六國を滅すことを目的にして居ます。六國とても、各〻强者を以て任じてゐるものですから、秦に屈服するやうな有樣には、永く我慢することは出來ません。それでこの連衡も、やがてこはれて、我利我利の諸國は、戰によつてその領土をふやし、その野心を滿足させようとしたのです。

戰爭は大小いく十、いく百もあつたでせうが、中にも燕と齊との戰では、初め燕が勝つて、齊の城はたゞ僅に二つだけが殘つて、あとはみんな燕に占領された。それを田單といふ齊の大將が、火牛の計といつて、牛の尾にたいまつをつけ、角には刀を縛りつけて、敵陣にあばれこませて之れをなやまし、忽ちにしてとられた七十餘城を復したといふ、すばらしい話もあります（この牛は青島牛の先祖ですよ）。また秦が趙を攻めて、長平といふ所で戰つたときには、秦は降參した趙の將士四十萬人を、生埋にしたといふ酷い物語りも、傳へられて居ます。

そのうちに、秦は周を滅し、その王に政といふのが出て來ると、諸將軍の力によつて、とう〳〵六國を滅し、西洋紀元前二二一年（我が國では第七代孝靈天皇の御代）に天下を統一しました。こゝで支那には、始めての統一的大國家が現はれることゝなつたのです。この政といふ秦の王こ

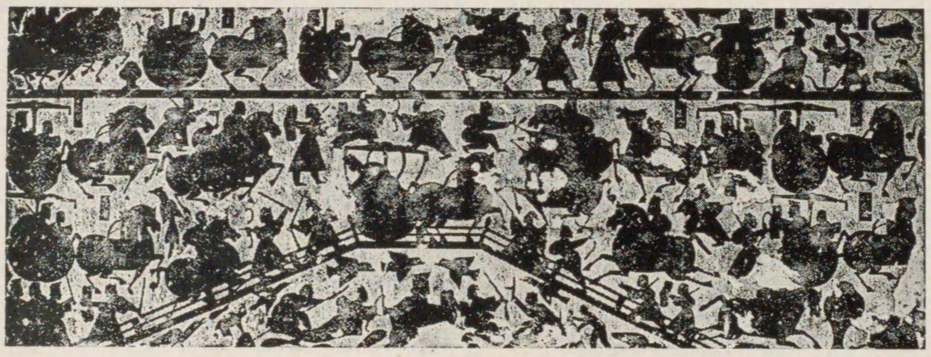
そ、萬里の長城で有名な、始皇帝なのであります。

食客と學者

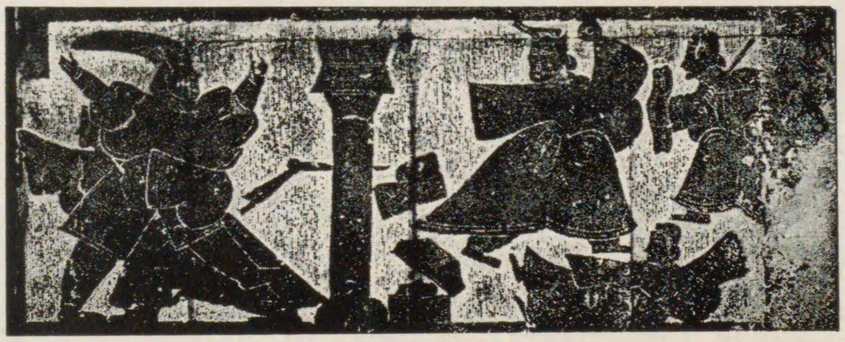
前の春秋時代にしても、この戰國時代にしても、力づくの世の中でありましたから、天下に事をしようとする人は、それ〴〵の才能に應じて、立身出世をもくろみました。殊に戰國には、それが一層はげしくなりましたし、また一方には野心ある大名が、一藝一能のある者は、何かの用に立てようと、之れを歡迎して、客分として優待しました。そこでかういふ食客は、どこの國にも養はれました中にも、齊の孟嘗君は食客常に數千人、楚の春申君は三千餘人、趙の平原君は數千人、魏の信陵君もまた三千人といふやうな、レコードが

(12) 支那古代の戰爭の想像圖です。戰車に乘つてる大將、騎馬武者もあれば、弓を射るもの、盾で防いで居るもの、刀を振ひ、矛をしごいて居るものも見えませう。橋の下は水戰の有樣です。後漢時代の浮彫からとりました。

(13) 戰國時代の燕の太子に賴まれて、荊軻といふ人が、秦王の政(後の始皇帝)を刺し殺さうとした事件があります。荊軻は秦の求めた燕の領地と、罪人の首とを獻げることにかこつけて秦王に逢ひ、獻上地の地圖の中にかくした匕首で、王を刺さうとしました。王はとらへられた袖をふりきつて逃げる。荊軻は匕首を投げつける――さういふ活劇を示したのが此の圖です。之れも後漢代の石刻から。



(12) 古代支那の戰爭圖



(13) 秦王政と荊軻

残されて居ます。しかもこの食客――居候は、「三杯目にはそつと出し」などといふのではなく、威張つたもので、「出づるに車なし、食ふに魚なし」などと、駄々をこねたものもあります。それでその生活も、なか〳〵ぜいたくなのがありました。趙の平原君が、楚の春申君の所へ使を出すとき、富強を示さうといふので、髪には玳瑁の簪をさゝせ、腰には珠玉で飾つた刀を佩かせてやりました。ところが楚の數千の食客の中で、一番いゝ待遇を受けて居たものは寶玉をちりばめた履をはいて居たといふことです。この食客は、然したゞぶら〳〵して居たゞけではなく、それ〴〵その主君のために、いろ〳〵の役目をしたのです。

それからまた當時は、賴まれゝばいやといはずに、人殺しも引受

ける一種の男俠も居ました。さういふものゝ活動の中で、最も劇的の場面を歴史に残して居るのが、燕の太子に頼まれて、秦王の政を刺さうとした荆軻です（第13圖参照。）

なほまた血なまぐさい風の、吹きまくる世ではあつたが、その亂れの間にも、學者が澤山に出て、いろ〳〵世を救ふ道を説きました。道徳政治で天下を太平にしようとつとめたのは、孔子についで賢人とあがめられる孟子であります、それから老子のやうに放任主義をとつて、それよりもはげしいことをいつたのは莊子でした。戰爭の盛な時ですから、戰術兵法を説いた人もあります。又こんな世の中は、とても道徳などで治まるものでない、人間といふものは、もと〳〵性質が悪いものだから、それを導き治めるには、刑罰の

周　春秋戰國時代の貨幣。

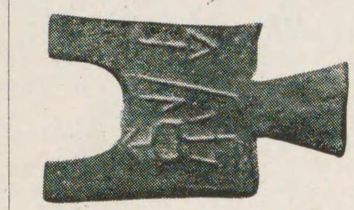
はすまされずに經濟生活がつづいてゆくのです。布(ぬの)の明刀錢(たぜん)は齊(せい)の貨幣で、現(げん)は刀錢(たぜん)上(じょう)農具に象つた。

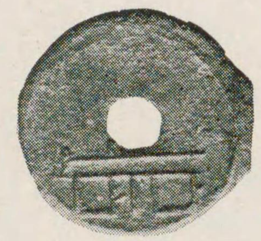
やがて蟻鼻錢(ぎびせん)下(か)刀の形をしたものが、共(ともに)に氣(き)の交(こう)換(かん)に使(つか)はれて來ました。

貝貨(かいか)は、もと〳〵性質が悪(わる)いものを制(せい)する一種の男(だん)性的の場面を歴史を刺さうとしたのです。布の文字は左(ひだり)から右(みぎ)へ、圓錢の文字は右(みぎ)から左(ひだり)へ、なほまた血(ち)なまぐさい戰(せん)爭の間にも學者(がくしゃ)達(たち)は道(どう)德(とく)政治で天下(てんか)を救(すく)ふ道を說きました。

人とあがめられる孟子(もうし)は、略體(りゃくたい)の字(じ)を一(いち)斬(ざん)と讀(よ)むのです。此(この)主義をとつて、それ人(ひと)の生(せい)活(かつ)が複雜(ふくざつ)になつてゆくのやうに放(ほう)任(にん)主義(しゅぎ)をとつて、それから老子(ろうし)のやうに放(ほう)任(にん)主義(しゅぎ)を說いたのは莊子(そうし)でした。

戰(せん)爭(そう)の盛(さか)な時(とき)には前(ぜん)の銅(どう)錢(せん)上(じょう)農具(のうぐ)に象(かた)つた貝(かい)貨(か)で人(ひと)もあります。又(また)こんな世(よ)の中(なか)は、とても來(き)ました。





幣貨の代時國戰秋春(14)

他に方法はないと、法律萬能を主張する學者もありました。商鞅や韓非は、此の派の學者でしたが、商鞅は戰國の初め、秦で實際の政治をとつて、治蹟をあげました。秦は代々この方針によつて、國を富まし兵を強くし、終には天下の統一を遂げることゝなつたのであります。

なほかういふ間には、產業も進んで來て、商業工業も盛となりました。貨幣なども前の貝貨から變じて、青銅錢が出來、刀とか布とかいふ名のものや、圓錢も現れて來ました。挿畫第14圖はその一例を示したものです。當時の美術工藝の進步は、各種の銅器（挿畫第6・7圖）に見られます。さうして其の銅器にある銘は、古い漢字の形を研究する上のいゝ標本でもあります。

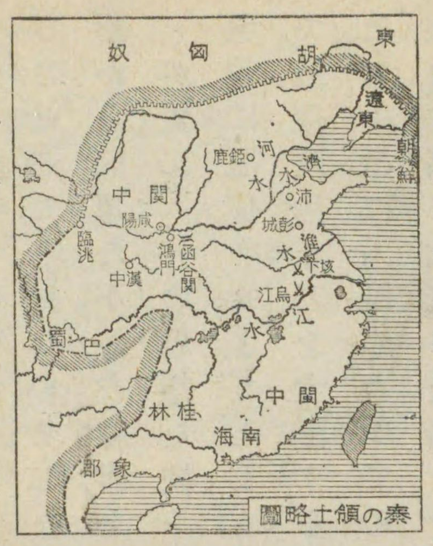
四　萬里の長城

——秦時代——

大皇帝

前に申したやうに、秦の國王の政は、長い間の紛亂をしづめて、支那の大統一者支配者となりますと、大昔の三皇五帝の功德を、自分ひとりに兼ねた、王の王だといふ誇から、皇帝といふ尊稱をつかふことにしました。（これから天子のことを、皇帝といふやうになつたのです。）また昔は王、后などが死ぬと、家來達が集つて、その主君の行などによつて、謚といふものをつける習慣がありましたが、家來のくせに、其の主君をかれこれ批評する

のは、不都合だといつて、此の秦の皇帝は謚をつけることをやめさせ、自ら第一世皇帝といふ意味で、始皇帝と稱しました。さうして子々孫々に傳へて、二世三世以て萬世の末までも、秦の國を榮えさせると意氣込みました。

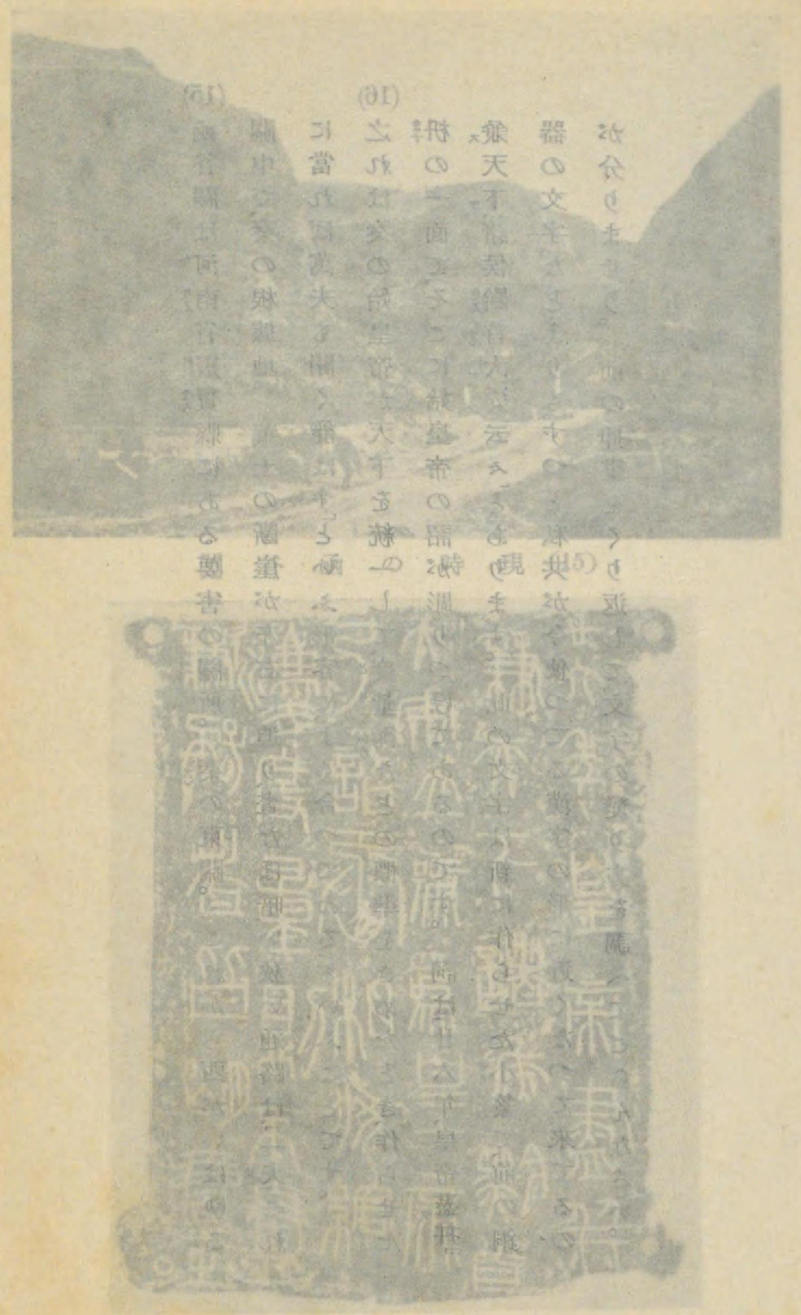


秦の領土略圖

支那はこの秦になつて、今まで分裂して、勢力を爭つて居た國々が、すつかり滅されて、一まとまりになつたので、また分立をさせるもとになるやうな、封建制度をやめて、すべてを皇帝が直接支配する、郡縣の制としました。支那はこれではじめて、統一された大國家を、見ることゝなつたのです。そこで天下に

再び騒動の起らぬやうに、武器を取上げるとか、人民に皇帝の威嚴を示すため、美美しい行列をして、各地を巡行するとかする一方には、度量衡の制度を改めて、全國同一のものさし、ますやはかりを、用ひさせることをきめましたし、文字も以前の大篆のやうな面倒な形から、簡單な小篆や隷書を作つて、使はせることゝしました。

が更に人々の思想を統一して、秦の政府の方針である法律萬能主義に、服從させようとしました。李斯といふ大臣の上奏を許して、道徳政治などを主張するのは、危險思想として取締ることゝし、その手始に人民のもつてゐる書物は、醫藥やトの書や農業の本の他は、すべて政府に差出させ、之れを燒棄てゝしまひました。これを焚書の事件といひます。それからさういふ思想を宣傳する、都



(16) 秦代の詔版(小篆)

(15) 函谷關は河南省靈寶縣にある要害の關所。秦の東關。これから西がいはゆる關中で、秦の根據地。黃土の斷崖が左右に迫り、晝なほ暗い狹い通路は「一夫これに當れば萬夫も開く能はず」といふ形容に、よく合つてゐるといふことです。

(16) 之れは秦の始皇帝が天下を統一して、度量衡などの標準をきめたとき、作らせた枡の一面で、そこに始皇帝の詔が彫りつけてあるのです。詞は「廿六年、皇帝盡并兼天下、諸侯黔首大安云々」とあります。此の文字は新に作らせた小篆で、前の銅器の文字などよりも、ずつと私共が今使つてる漢字の形に、近くなつて來てるのが分りませう。前の挿畫をくり返して、文字の變り方を調べてごらんなさい。

(15) 現時の函谷關

(16) 秦代の詔版(小篆)

の儒學者を捕へて、四百六十人も生埋にしました。これを坑儒の事件といひます。これでやつと危險思想を禁止することが出來たと、皇帝もその大臣達も安心をしました。また皇帝の強い權力の下には、人民は不平ながらも、みんな恐れて、うはべは從つたのでありました。

萬里の長城

漢民族がかうしてまとまりのついたとき、北の方には匈奴といふ蒙古の野蠻人の勢力が、強くなつて來ました。匈奴はゴビの沙漠の北に住み、牛、馬、騾駝などを飼ひ、その家畜と一しよに、水や草のある所を動きまはつてる游牧民で、騎射が最も上手でした。戰國

時代に秦や趙や燕に侵入して、漢民族を苦めたので、趙や燕では、國境に城壁を築いて、之れを防いだこともありました。始皇帝は大統一を遂げた上は、さういふ漢民族の害をなすものを、はうつておくのは、その體面に關することですから、三十萬といふ大軍を出して、之れを攻め破り、蒙古の一部分を取りました。そこで侵入を防ぐために、いはゆる萬里の長城を築いたのです。それは前記の戰國時代の城壁をも利用し、山をめぐり谷を越えて、支那の西のはて、甘肅省臨洮縣から、東は遼東に達しました。（今あるものはずつと後の、明の時代に出來たもので秦のではありません。當時のものははるか北方に築かれたものですが、現在では其の遺址は明かでないといふことです。）

始皇帝はその強大な權力で、國內の統一もする、外民族をも擊退する。その宮殿の阿房宮の如きは、今まで見られなかつた大建築で、善をつくし美を極めたものであつて、後に詩人は、これが火災にかゝつたときの有樣を形容して「火三月紅なり」ともいつて居る位です。したいと思ふこと、何一つ出來ないことのない此の大皇帝も、然しなほ安心の出來ないことがありました。それは「死」です。そのためいろ〳〵な迷信を信じて、どうかして死から、のがれたいと願ひました。支那では昔から、仙人といふものが、東海の中の神山に住み、不老不死の藥を作ると信ぜられて居ました。その仙人の處に、その藥をとりに行くのは、方士といつて特別な修業をした者でありました。始皇帝はかういふ方士に賴んでは、その藥を求め、永久の命を得たいと願つたのです。けれども方士たちは、皇帝から澤山のお金をとつては逃げてしまひます。最後の巡幸のと

きの如きは、「死」といふ語をつかふことを禁じ、犯せば死刑にすると
さへ申しましたが、それほどに欲しかつた不死の藥は、とう〳〵手
に入らずに、いやでいやでたまらなかつた死神の手は、却つて此の
大皇帝を攫んでしまひました。　それは西洋紀元前二一〇年のこ
とです。

虞美人草

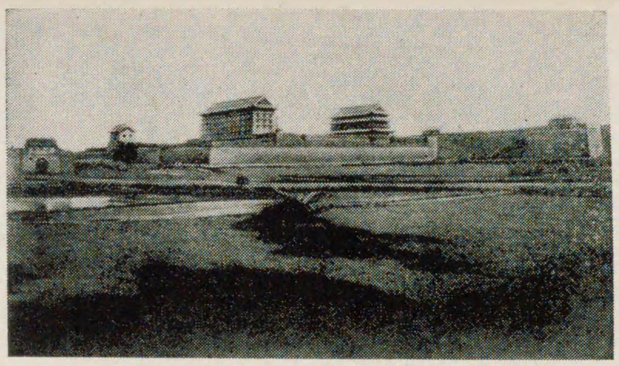
始皇帝の次にはその末子の胡亥といふのが立つて、二世皇帝と
なりました。　この二世皇帝は、父に似もやらぬ愚な性質で、天下を
治める腕もなく、たゞ自分の快樂ばかり考へる人でした。　皇帝は
賢くなく、政をまかされた大臣等は、勝手なことをして、政をみだす
といふことになつたから、始皇帝のときには、その權力に恐れて、反
抗したくも反抗の出來なかつた不平の民は、これを機會に方々で、
むほんを始めました。　その中でも項羽と劉邦とが最も有名です。
項羽は書物を習つたときには、「字は姓名が書ければ十分だ」とい
つて、學問には骨を折らず、擊劍を教へられたときには、「擊劍は一人
を相手にするだけのことだ、己は萬人を敵とする法を學ぶんだ」と
いつて、兵法をならつたといふことです。　項羽と劉邦とは、めいめ
い方面を分けて、秦の兵と戰ひましたが、つひに劉邦がさきに秦の
都に討ち入つて、秦を滅しました。　秦は始皇帝が萬世に傳へると
威張つたが、たつた二世十五年で亡びてしまつたのです（西紀前二〇六年。）
項羽はこれを聞いて、秦の都の咸陽へ急ぎました。　道で劉邦を

鴻門に招いて宴會を催し、その場で之れを殺さうとしましたが果さず、劉邦は甘く逃げてしまひました。咸陽に入つた項羽は、さんざんに都を荒らし、秦王は殺す、宮殿には火をつける、財寶は奪ふ、なほひどいことには始皇帝の陵も掘りかへし、そこに埋めてあつた寶物を、盜むといふ亂暴までして、東に引き上げました。

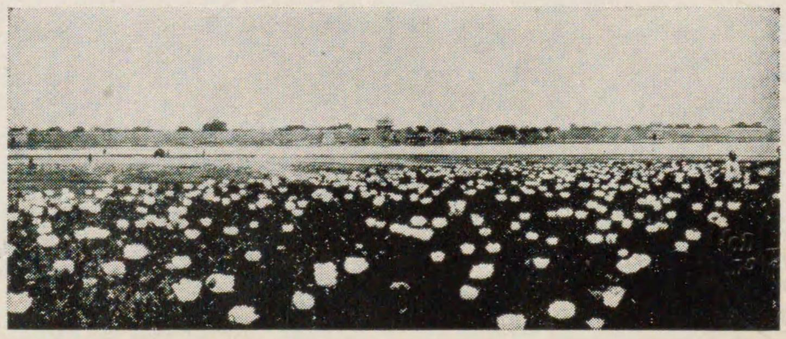
かくて後この二人の天下爭ひとなりました。之れを漢楚の爭といひます。それは項羽が自ら西楚の覇王、劉邦は漢王と稱したからです。項羽は年の若い元氣な大將、劉邦はもう五十を越した考深い將軍でした。二人の氣質は、始皇帝の天下巡幸の行列を見たときの感想でも、うかゞはれませう――項羽はその盛な樣を見て「よしあいつに代つてやるぞ」と力んだのに、劉邦は「男と生れたら、

(17)陝西省の咸陽。圖で白き帶の如く見えるのは渭水といふ河。その向に城壁樓門の見えるのが今の咸陽縣。秦の首府のあとは、今の城市の東にあるといふことです。圖の前面の花は罌粟で阿片をとるのです。

(18)長安。同じく陝西省にあつて、周の鎬京と同じ地。前漢、隋、唐などの首府として榮え、支那の文化史の上に大切ないろ〳〵な遺蹟遺物に富んでゐます。圖は現在の長安縣の北門を示したもの。支那の都會は大小粗密の違ひはありますが、其の町全體を城壁で取り圍んであつて、諸所に城門を設けて交通防禦に便してあります。一口に城といつても、我が國の城とは大變に違ひがあります。



(18)陝西省長安の現景



(17)陝西省咸陽縣城

ああなり度いものだ」といつたといふことです。

二人の爭は、つひに項羽のまけとなりました。垓下といふ城で、漢の軍に圍まれたとき、もう其の運命をさとり、詩をつくつて、その愛して居た虞姫といふ美人に別れをつげ、圍を破つて逃れましたが、烏江といふところで、つひに自殺してしまひました。名前だけ書ければ、いゝといつた人は、立派な詩人でもあつたのでした。またその虞姫の墓からは、あの美しい虞美人草が、萌え出でたといふ傳へもあります。

さてこの戰爭に勝つて、劉邦は天子の位につきました。これが漢の高祖といはれる人です。高祖は政治のやり方は、大體は秦をまねましたが、郡縣制度と封建制度とを交ぜた郡國の制度にし、大

名に領土を與へもしたが、大切な場所は皇室の直領地としました。

大帝國としての秦は、僅に十五年で亡びましたが、其の名はいま私どもがよく使ふ支那といふ語のもとをなすことゝもなり、また英語のチヤイナ、ドイツ語のヒナなどのもとゝもなりました。この秦の支那音はチンで、これが後にインドに傳はつて、チナとかチニスタン(チンの土地)とか訛りました。このインドの語が、ヨーロッパに入つて前記の語のもとゝなり、一方はインドに來た支那の僧侶によつて、その本國に逆輸入されることゝなつたのです。秦の名はかくして不滅になつたともいへます。

五　沙漠をこえて

――前漢の時代――

男まさりの皇后

漢の高祖は秦に代つて天下を取りましたが、それは彼の股くぐりで有名な韓信や、張良や蕭何などといふ、勇將や謀士の輔によることが多かつたので、かういふ人々を大そう厚く賞して、自分の一族と同樣に、大名にも致しました。高祖の皇后の呂氏は、帝がまだ身分のひくい時から、よく夫をたすけ、戰爭の間にも辛苦を共にした人でしたが、皇后になると、いろ〳〵政治の上でも、夫の片腕とも

なつてはたらきました。然しその性質が疑ひぶかくて、大名でもあとで漢の皇室の禍になりさうなものは、功臣であつたものでも何でも、之れを殺したり除いたりすることを、帝にすゝめました。

高祖の次の惠帝のときには、一層その勢力を振ひ、自分の一家のものを、大臣などにしましたが、よる年波と病とにはかてず、權力に心ひかれながらも、つひに夫帝のあとを追ひました。あとで一族は不安となり、不安のあげくに亂を起しましたが、忽ち滅されてしまひました。

其の後、文帝、景帝などが出て、租税を免除したり刑罰を輕くしたりして、民をいたはる政に意を用ひ、宮中の婦人の衣服も、長くひきずるやうなものは、許さなかつたといふ位に、質素を旨としました。

その上豐年が打つゞいて、年貢の穀物もよく納り、穀物は朝廷の倉にみち〳〵て、腐るほどになつたと傳へられます。

此の文帝も景帝も、諸侯から出て、本家をついで皇帝となつたので、他の諸侯はとかく之れを輕く見る傾があり、景帝の時には一層わがまゝになりました。そこで景帝は帝室の威を示すために、吳王の領土を削つたところ、吳王は楚王等七國を誘ひ、いはゆる吳楚七國の亂を起しました。一時は大騒ぎでありましたが、つひに帝室の勝利となり、これらの諸國は全く大名たるの實力を、奪はれることゝなりました。それで皇帝の權力は、非常に強くなり、その富はまた前にいつたやうに、增大して來ましたが、かういふ時に、景帝についで天子となつたのが、武帝といふえらい方でした。

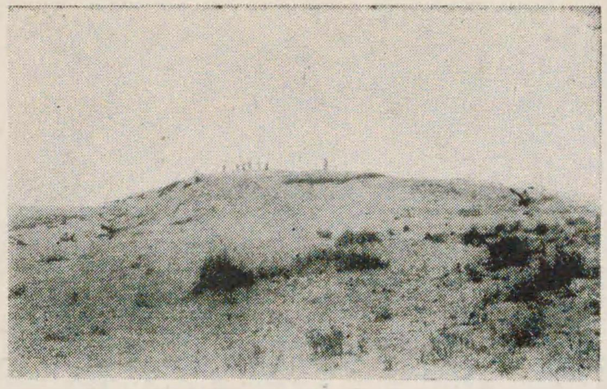
土産の葡萄

武帝は文武いづれにも、すぐれた才能をもつた上に、前申したやうに、權力も強く國庫も富むといふ好都合のときに、帝位につきましたから、これこそ鬼に鐵棒。何事でも出來る筈であつたし、また實際いろ〳〵な仕事をして、大皇帝たる偉大さを示しました。

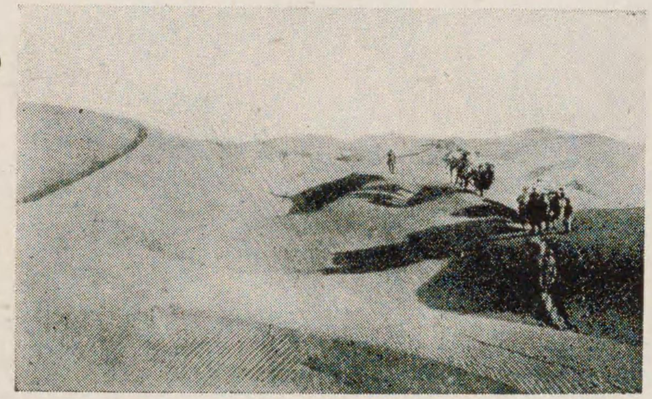
前に秦に破られた匈奴は、漢の初に勢をもりかへし、漢の領土を侵したので、高祖は之れを討つたが負けて、擒にされたこともありました。それゆゑ匈奴は鼻つぱりが強く、漢は内親王（支那では公主といひます）を、その酋長の妻にやつて、御機嫌をとるといふ有樣でした。こんなことは、武帝が我慢できるはずはありません。それで度々これを

(19)玉門關址。これは漢の領土の西端西域への關門の一つの遺址。イギリスのスタイン氏の探檢の際の撮影。かういふ沙漠地帶の西が漢代の西域で、(20)(21)に示したやうなタクラマカン沙漠に連なります。其の當時の國々はかういふ沙漠の間のオアシスにあつたものです。今も圖のやうに駱駝が唯一の交通機關。

沙丘に明け沙丘に暮れた、二千年前の張騫(ちやうけん)や、其の後の班超(はんてう)の探檢は、想像しても其の苦しみはなか〳〵推測ることもむづかしいでせう。スタイン氏はかういふ沙漠地の漢代の遺蹟から、いろ〳〵な貴重な發掘品を得ました。あとで說明するものに、其の一二があります。



(19) 敦煌玉門關址(甘肅省)



(20) タクラマカン沙漠(新疆省)

上　同 (21)

討つために兵を出しましたが、最後の勝利を得るには、西の方の國國と同盟するのが、得策だと考へました。それで前に匈奴にひどい目にあつて、西方へ逃げた大月氏といふトルコ人の國に、使を出すことゝなりました。

今の地圖で、新疆省といふ支那の西の地方や、そのまた西の中央アジヤなどを、漢の時代には西域と總稱して居ました。そこには沙漠もあれば、嶮しい山々も連つて居るし、氣候も大變にわるいのですから、その旅行の困難はいふまでもありません。今まで人のやらなかつた此の冒險旅行は、かういふ地理上の苦みの上に、更に匈奴の勢力の及んだ地方を通るのですから、その危險も一通りではなかつたでせう。この冒險的な使に、自ら進んで當つた人を張

騫といひます。西洋紀元前一三九年に首府の長安を立つて、西に向ひましたところ、中途で匈奴につかまり、十年ばかりも捕虜とされましたが、やつと免れて苦心の末、目ざす大月氏に着き、使命を傳へることが出來ました。然しこのさん〳〵な苦みのあげくの願ひにも拘らず、大月氏は應じてくれませんので、仕方なく〳〵また本國への、つらい旅をつゞけなければなりませんでした。一しよに出たのは、百人餘もありましたが、歸りついた時は、たつた二人となつてしまつたといふことです。

この大旅行は、其の目的は遂げられなかつたが、今まで不明であつた西方の國々の事情が、よく漢に知られたし、これがもとで西方の珍らしい品物も、だん〳〵に輸入されることゝなり、それが漢の人々の葡萄の葡萄酒の如き血馬なども來て、武都の人術上の挿畫の一助にした。

さておいた

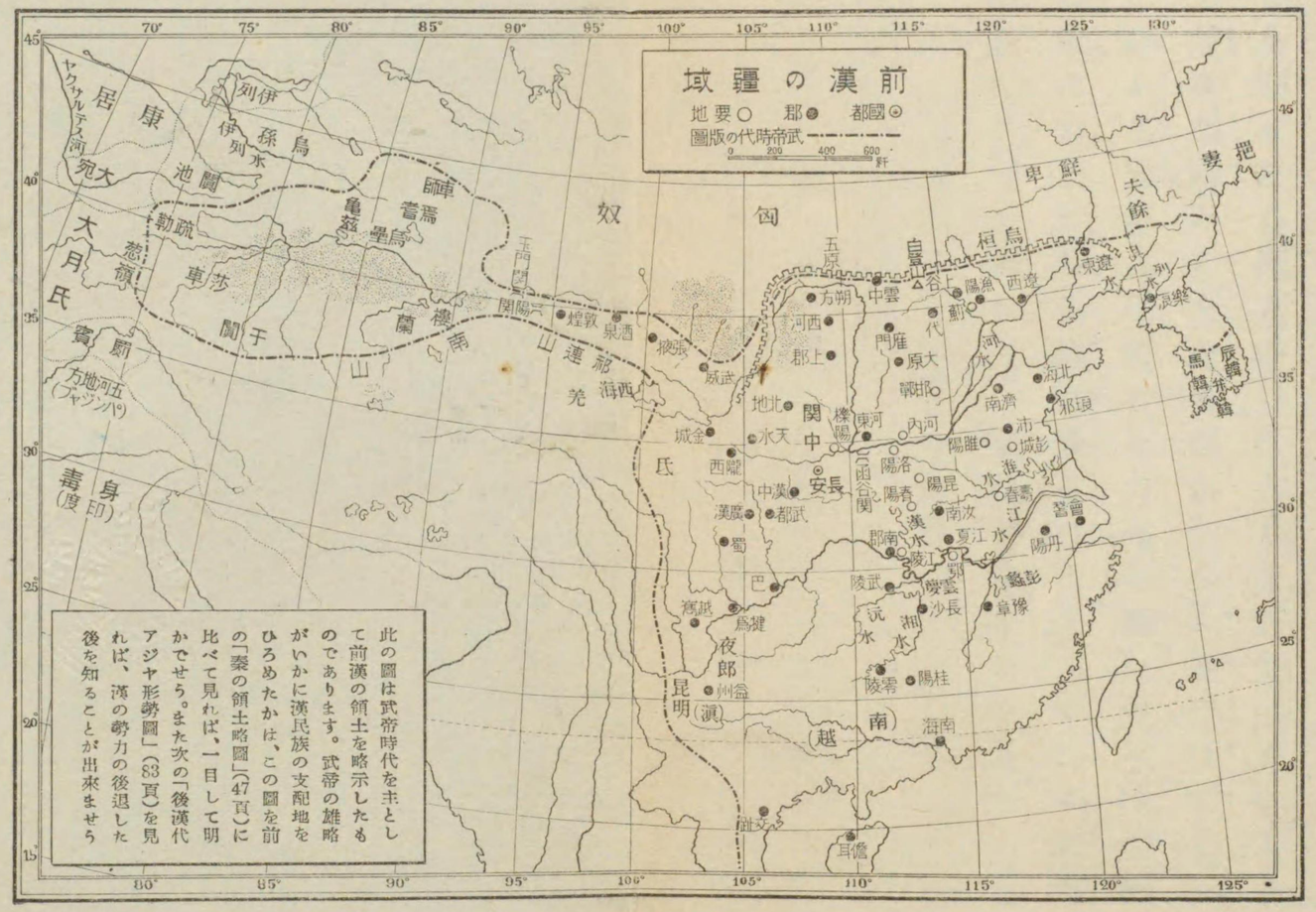
騫は美しい汗血馬を得て、

騫といひます。西洋紀元前一三九年に首府の長安を立つて、西に向ひましたところ、中途で匈奴につかまり、十年ばかりも捕虜とされましたが、やつと免れて苦心の末、目ざす大月氏に着き、使命を傳へることが出來ました。然しこのさん〳〵な、苦みのあげくの願ひにも拘らず、大月氏は應じてくれませんので、仕方なく〳〵また本國への、つらい旅をつゞけなければなりませんでした。一しよに出たのは、百人餘もありましたが、歸りついた時は、たつた二人となつてしまつたといふことです。

この大旅行は、其の目的は遂げられなかつたが、今まで不明であつた西方の國々の事情が、よく漢に知られたし、これがもとで西方の珍らしい品物も、だん〳〵に輸入されることゝなり、それが漢の

人々の葡萄の葡萄酒の如き血馬なら來て、武都の人術上の挿畫の一助にた

さておいた



す。(蒼)汗ら で美し て騫

人々の生活を豊にすることゝもなりました。皆さんの大好きな葡萄の如きも、かうした張騫の旅行のおみやげともいへるのです。葡萄酒もまた間もなく漢人の口に入りました。クローバー(苜蓿)の如き、胡瓜、胡桃、胡麻、みんな此の西からのおみやげです。なほ汗血馬などといふ名馬が三千頭も、その高い嘶をつゞけて西方から來て、武帝の厩につながれる、魔術使もはるゞやつて來て、長安で都の人々をよろこばしました。なほギリシヤ方面のすぐれた美術上の意匠なども、其の後次第に漢に傳へられることゝなりました。

挿畫の第19・20・21圖は、當時の西域の旅を想像させる一助にと、新疆省の沙漠の有様を示したものです。

さて張騫の使に出てゐた間も、武帝は決して匈奴のことをすておいたのではなく、將軍を出して之れを討たせもしましたが、張騫

の歸つた後には、大軍を發して、大いに之れを破り、遠くゴビの沙漠の北に擊退して、漢民族は一時その大勝利を祝ひました。此の後で張騫は西域の國の烏孫といふのに出かけて、この國はじめ多くの西方の國々に、漢へ貢を納めることを誓はせました。

それから武帝は、今の滿洲の遼東から朝鮮北部をも、領土に加へました。此の遼東の地方には、古くから漢民族の植民したものもありましたので、周の始めに殷の一族の箕子が難を避けて來て、朝鮮といふ國を建てたなどといふ傳説も作られたのです。それはとにかく、箕氏を名のる朝鮮國、それを滅して戰國の末に興つた衛氏の朝鮮國は、ともに漢民族の建てたもので、北部朝鮮に及び、今の平壤を首府としてゐました。武帝はこの衛氏の朝鮮を滅して、四郡を設けました。中にも樂浪郡は平壤附近を中心としたもので、そこは長らく漢人の植民地として開けたところ。當時の古墳は今も大同江南に千餘も遺つてゐて、そこからの發掘品は、漢代の文化を物語る貴重な資料であります。なほ、半島の南部には土着の韓族の國が群立してゐて、辰韓、馬韓、弁韓などと總稱されましたが、それぞれ中に多くの小國を含んでゐました。

漢の勢力の及んだ所を、地圖で御覽になれば、どんなに支那の領土が、前のときよりも廣くなつたかといふことが、おわかりになりませう。

不老の神藥

武帝はかう云ふ外國征伐の一方に、學問や文學にも注意し、まづ董仲舒といふ學者の說を採用して、儒學を以て、政治や教育の方針を定めました。支那で儒學が國家の政治や教育と、密接な關係を有つやうになつたのは、此の時からのことです。帝自身も有名な詩を作りましたが、史記の著者たる大歷史家の司馬遷や、多くの美しい文章を書いた司馬相如も出ました。また東方朔といふ人は文章も上手として知られて居ましたが、いろ〳〵の滑稽をもつて宮中を賑はし、そのうちによく帝を諫めて、その惡を改めさせたといふことです。武帝もかの始皇帝のやうに、不老不死を願ひ、方士の言に迷つて、澤山な費用をつかつたり、仙人に逢ふため、神藥を作るためには、馬鹿々々しいやうな建物をも、やたらに造りました。

皇帝のかういふ迷信は、いろ〳〵なわるい事が、宮中で流行するもとゝもなり、遂には皇太子を殺すにさへ至りました。

こんなことで非常な無駄づかひをしました上、前にいつたやうな度々の戰爭に、また大變な費用をかけましたから、さしもの國の富も殘りなく、その補は民間からとらなければなりませんでした。それで租稅も高くする、新しい稅もふやす、或は賣官といつて金を納めたものには、官職を授けることや、その他の種々なことを考へ出しました。然し何れにしても、民から搾り取るのですから、人民の不平はだん〳〵高くなり、恨も重なつて來ました。人民のかういふ樣子を見て、その結果の恐ろしいことを察しましたから、帝は詔を發して民をなだめ、無事にその治世を過ごすことを得ました。

なほ武帝の時に、初めて年號といふものがたてられました。これは前にいつた方士の説に基いて、其の御代のさいさきを壽ぐためにしたのです。これがもとで代々めでたい名を選び、いやな事が起れば、すぐ改めることゝもなりました。

武帝から二代目の宣帝は、内は民治に心をつくし、外は匈奴を破り、西域の國々をも服して、西域都護府を設けました。また帝が宮中の麒麟閣に、文武の功臣の肖像を描かせたことは、名高い話です。

美人の嘆き

次の元帝のときに匈奴は南北に分れて、爭をしましたが、その南の方の酋長は漢に援をたのみ、なほ其の身の安全を謀ることから、結婚をも許されたいと願つて來ました。前にも一寸いひましたやうに、今までにも、外國から漢の内親王を、妻にと願つて來たことは、時々ありました。元帝はこの南の酋長をなづけて、北と爭はせておくことは、漢にとつては都合のいゝことゆゑ、これを保護してやりました。さて誰をその匈奴の王の妻にやらうか――これには少しこまりました。が宮中の女官の中から、一番醜いものを選ぶことにしました。

支那では後宮（婦人たちは建物の一番奥の部分に居るから、かういふのです）の美姫三千などといつて、天子に仕へるものだけでも大變な數です。その宮女を宮中に召されるときには、宮中のお抱への畫家が、その姿を寫したのださうです。それでどんなおたふくでも、みんな美しく描いてもらはうと、畫家

に賄賂をやつて、甘く美人になりすましました。たゞひとり王昭君といふほんとうの美人だけは、そんなことをしませんでしたゝめに、醜い姿にかゝれました。その繪姿が帝の目に觸れたので、この女を遣はせといふことになりました。お暇乞をしに來た王昭君の美しい姿に、元帝は驚きもし、惜しくもなつたといふことですが、約束は破ることが出來ません。王昭君は馬上に琵琶をかゝへて、遠く北への旅に上つたと申します。さうして蒙古の地に天幕を家とし、慣れぬ生活の中にも、常に漢を慕ひながら、その氣の毒な一生を送りました。その墓には其の周圍の樣子と違つていつも青々とした草が生えるといひ傳へて居ります。王昭君が北への旅の姿は、支那では詩にも畫にも、よく題材とされます。

飛行機の出現

そのゝち漢の皇室では、外戚の王氏の一家が勢力を振ひ出し、平帝の時には、王莽が攝政となりました。王莽は表むきは儉約謙遜にして、周初の善政を行ふことをいひふらしましたが、實はなかなかずるい政治家で、いろ〳〵と小刀細工をして人望を集め、皇帝の位をねらつたのでした。其の頃の支那には、未來記とか豫言とかいふものが、大變に信じられて居ましたので、王莽は自分の手下にいひつけて、自分の評判の高くなるやうなことを、しくませました。その上手なやり方に欺かれたり、其の學問に感心したりして、王莽の學德を讃美して、漢の朝廷に書を上つた者が、四十八萬五千百七

十人もあつたといふことです。かういふ勢になると、更にへつらふ者も出て來まして、ある井から白い石が出たが、それには「王莽が皇帝になる」と書いてあつたなどと、上奏するものもありました。で遂に王莽はその豫言を實行して、漢の皇帝を廢して、自ら帝位につき、國の名も新とつけました。それは西洋曆の八年の事です。

これから何年何十年などと記すのは、すべて西洋曆を略したものと思つて下さい。

新といふのは、政治上に新しいことをしようといふ、意氣込みを示したものでしたが、その新政がまことにめちやくちやに行はれたので、人民の迷惑は一通りではありません。前の讃美者は、今はもう不平たら〳〵になりました。殊に貨幣は澤山の種類を出しましたが、その相場を勝手に、どん〳〵かへましたから、元來かうい

(22)支那の古代の鏡は銅と錫との合金で、其の背面にはいろ〳〵の模様が鑄出されてゐます。さういふ鏡は秦頃のものが始めらしく、漢代に發達し、唐には種々の技巧をこらしたものも作られました。

(22)は王莽の支配中の居攝元年(西紀六年)の年號があるので、有名なもので漢の鏡の一標本です。

(23)は海獸葡萄鏡といはれてゐる唐代の鏡。獸と葡萄(その他に鳥も居ますが)の文様が主となつてるものです。鏡の模様は漢からだん〳〵進歩して、意匠も自由に幾何學の圖式みたいなものから繪畫へと進んで來て、唐ではずつと自由なものになります。葡萄は漢代に西域から支那に輸入されたものですが、そのひろまるにつれて、こんな模様にも應用されてました。

(22) 王莽時代の鏡

(23) 唐の海獸葡萄鏡

ふ方面に、鋭敏な漢民族は、王莽の政治を呪ふやうになりました。

このときまた匈奴の侵入も始りましたが、王莽は前に申したやうな人ですから、匈奴を征伐するには、何か新しい方法でやりたいと思ひ、天下に令して、兵器兵術の新式なものを募りました。其の中に「一日によく千里を飛んで、敵狀をうかゞふことが出來る」といふ、兵器の發明者がありましたので、早速それを採用しました。これは鳥の形に作つたものゝ上に乘つて、始めは凧のやうに綱であげてもらひ、そこから機械のしかけで動くものであつたらしいのです。いよ〳〵それをやつて見ると、數十間飛んだころ、つひに墜落したと傳へられて居ます。失敗ではありましたが、恐らくこれが世界最初の飛行機、しかも軍用飛行機で、さうしてまた恐らく世

界最初の墜落の記錄でせう。

さて匈奴征伐も思ふやうにならず、國内には方々にむほん人が出て來る。王莽に倒された漢の一族の劉秀は、このとき復讐を企てまして、とう〳〵二十三年新を滅して、また漢の皇室を再興し、都を洛陽にさだめました。この劉秀を後漢の光武帝と申します。漢はかういふ風に前後の二期になりますので、王莽以前を前漢、光武帝からを後漢といひます。又その首府の位置から、前を西漢、後を東漢ともいひます。

六　ローマへの道

――後漢の時代――

佛陀の福音

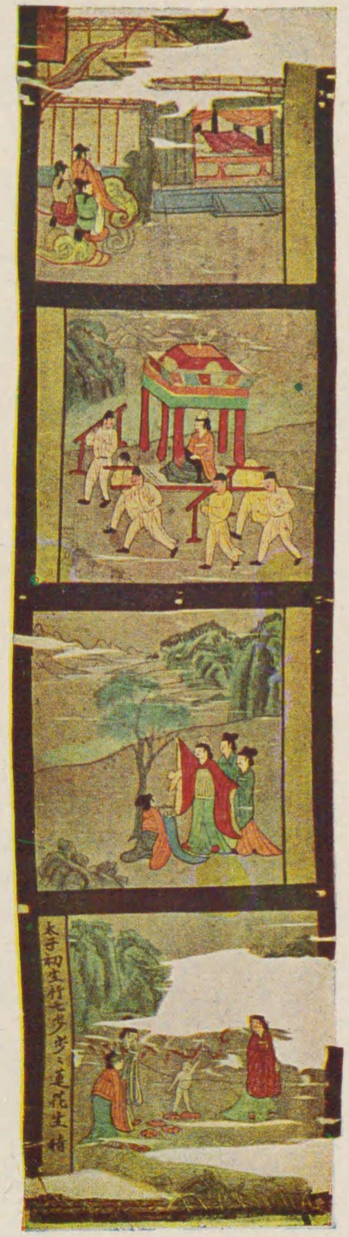
光武帝は天下の騷ぎを鎭めてから、王莽のときのわるい習慣を除いて、節義を尙ぶ氣風を養成することにつとめました。次の明帝も民政に心をつくしましたが、帝の治績には、支那の信仰上の重要な出來事――佛教傳來の話が織込まれてゐます。

佛教はインドの釋迦が始めたものであることは、申すまでもありません。釋迦は姓を喬多摩、名を悉達多といひ、年代は孔子より

も少し前に、インドの一城主の王子として生れ、何不自由なく、此の世の樂みも喜びをも、味はふことが出來ました。然しつく〳〵人間の世には、苦の多いことや、また人々がその苦みにわづらはされてる有樣を見て、之れから免れ、之れを救はうと決心された。それで王者となるべき身分をもすてゝ山に入り、聖者についたり、獨り思案したりして、つひに覺を開き、今までインドにあつた宗教の他に、別の新しいものを唱へ出したのです。

こゝで昔のインドの事を一言しておきませう。インドは今のヨーロッパ人と同じアリヤン族が、中央アジヤ地方から、インド河の上流に侵入し、土着民を征服して、最初の社會を作つたのが、四千年位前のことゝ傳へられてゐます。それからだん〳〵と東の方

(24)これは甘肅省敦煌の千佛洞で、前にいつたイギリスのスタイン氏によつて發見された唐時代の畫。氏はここでかうした貴重な畫や、壁畫や文書などを發見して、ロンドンに持ち歸りました。實に支那文化史上の重要な材料です。この圖は釋迦の降誕についての傳說を示したもので、第一段は釋迦降胎のおつげがマヤ夫人に下るところ。第二段はマヤ夫人がお產のために、其の故國に歸るところ。第三段はその途中、無憂園で休んだとき、マヤ夫人の右腋から釋迦が生れるところ、夫人の手をかけて居るのは無憂樹。第四段は釋迦が降誕と同時に七步を步み、天上天下唯我獨尊の獅子吼をなし、その足あとには蓮華が生じたところを描き出して居ます。これは日本の繪卷物をたてにしたやうなもので、詞書のあるのも注意すべき點であります。



(24) 釋迦降誕の圖(唐時代の繪畫)

に進んで、ガンガ河域に及び、やがては南の地方をも占めました。然し統一されたのではなくて、小さい澤山の國――部落――の群立の有様でした。さういふ間に其の社會には、僧族、王族、平民(以上はアリヤン族)奴隷(土人)の四階級が出來、僧族のみが絶對最高の地位を占め、其の宗教バラモン教の教權を握つて、他の階級を抑へ、其の間には嚴しい法律で取締りがありました。然し僧族の增長と墮落を見て、宗教を改革して、社會的にも宗教的にも、平和安心を得たいといふ希望が、多くの人々の中に起りました。釋迦はかういふ萬民の熱望にのつて、救ひ主として現はれたものであります。

此の佛教は其の後、インドを初めて統一した、阿育王のとき、其の保護によつて、全インドにひろまり、北は中央アジヤにも、南は海

をこえてセイロンにも傳はりました。さうして中央アジヤ方面から、更に東して、前漢の終り頃には、たしかに支那にも傳はつたと思はれます、然し有名な物語りは、明帝が或るとき、西方に功德あらたかな神のあることを夢みて、佛陀の教のあることを知り、そこで使を大月氏國に出して、經文や佛像を得、僧侶を伴ひ歸つたといふのです。さうしてその僧侶たちは、洛陽の白馬寺といふのに居て、經文を支那文に譯したといふことですが、これはどうも後世の作り話のやうです。

後漢の代には、次第に西の方から僧侶の來ることが多くなり、布教も盛になれば、信者もふえて來ました。さうしてずつと後にはなりますが、朝鮮にも、それからまた日本にもひろまつたのです。

佛教は支那人の信仰の上ばかりでなく、その藝術の上に影響したことは、非常なものでした。それはあとで申しませう。

明帝のつぎの章帝も、よく人民の苦を察して、善政を行ひましたから、天下は太平を樂みました。

紙の發明

支那では早くから文字もつくられ、書物も出來たことは、前からの話でお分りになつたでせうが、さういふ書物を、私達が今、普通に見るものゝやうにお考へになつたら大間違であります。第一、私共が考へるやうな紙は、當時まだ支那にはありませんでした。文明を誇る西洋にだつて、ありはしなかつたのです。

それなら支那の書物は、どんなものであつたかと申しますと、その頁は竹片です。竹を短冊形に割り、火に炙つてあぶらをぬいて使つたのを簡といひます。これに金屬の筆でほりつけたこともありませう。後に墨や毛筆が發明されてからは、それをも使ひました。さういふ頁は麻糸か鞣でくゝられたのです。書物を數へるのに、一卷二卷などといふのは此のためです。また木片を用ゐたこともありますし、帛即ち絹を使つたこともあります。歴史に名を傳へることを「名を竹帛に垂る」などといふのも、かういふ事實から出來たのであります。挿畫第25・26圖を御覽なさい。

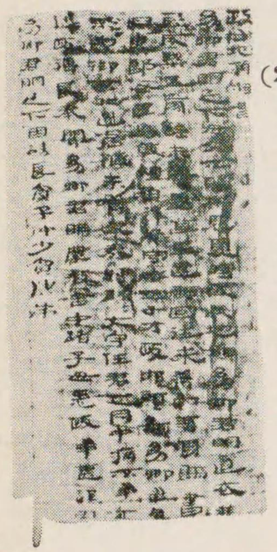
さういふものが、紙の役目をして居ましたが、竹や木の不便はいふまでもなく、絹も價が高くて實用的ではありません。それでも

(25) 前にいつたスタイン氏の發掘品の中の木簡の一例。支那で紙の發明のなかつた前には、竹や木や絹布が紙の代りをしてゐたといつておいた、其の木の實物。

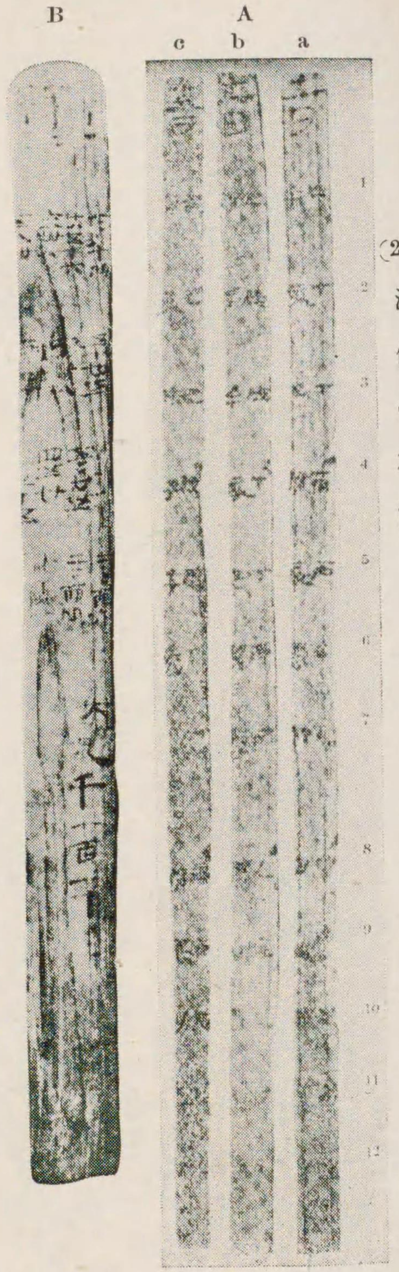
A。前漢の宣帝の神爵三年(西紀前五九年)の曆の一部。aは十七日、bは十八日、cは十九日と上に書かれ、各日の下に、一月から十二月までの、其の日の干支が記されてゐます。a一月十七日は戊午、二月十七日は丁亥……aからbに讀めば十七日戊午、十八日己未、……といふやうに分ります。

B、算術の九九の表で、第一段は右から左へ、「九九八十一」「八九七十二」「七九六十三」等五段に記され、「一一而一」で第五段が終り、六段目に大きく「凡千一百一十三」と書かれてゐます。あなた方のする九九が、二千年も昔にかういふ物に記され、こんな沙漠地防禦に赴いた兵隊達が、口にしてゐたといふことを知ると、支那の昔語りも、全く緣のないことでもないといふことがお分りでせう。

(26) これは帛(絹布)に書かれたもので手紙です。政(姓は不詳)といふ人から、王子方といふ友人が敦煌地方に赴任するので、同地にゐる君明といふ知人に、其の紹介を兼ねて御無沙汰見舞をしたものです。なほかういふ簡や帛の文字は、漢隷といふ體で隷書です。下は紙の一片です。前に擧げて來たものと比べて、漢字の字體の變化が分りませう。



(26) 漢代の帛及び紙



(25) 漢代の木簡

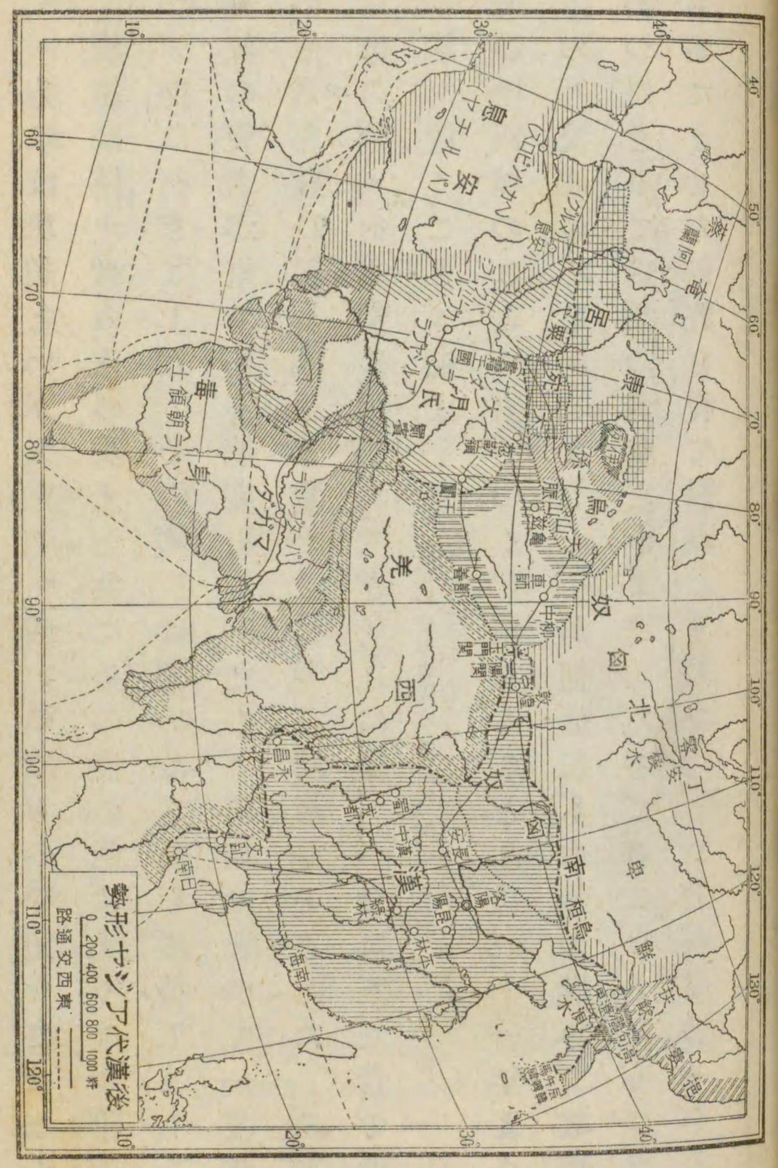
つと便利なものゝ發明には、どんなに多くの人々が、苦心をしたことでせう。さういふ事情は、もとより少しも記されては居ませんが、この後漢の和帝のとき元興元年（西洋暦では一〇五年。日本では日本武尊の出られた景行天皇の御世）に、宦官（宮中の女官の監督をする役）の蔡倫といふ人が、とう〳〵一つの發明に成功しました。この紙は樹皮や古い麻布などを煮とかし、それを漉いて作つたのです。これは今日普通に考へる紙の形式よりも、或は布に近かつたものであるかも知れませんが、この製紙法の發明は、非常な惠を人人に與へたものであつたことは、いふまでもありません。

これからいろ〳〵の改良が企てられて、多くの種類の紙が、時代の下るまゝにつくられて來ました。さうしてそれはずつと後のことにはなりますが、唐の時代に、サラセンといふアラビヤ人の國

に傳はり、そこでまた改良があり、更にそれがヨーロッパに入りました。ヨーロッパで、又々改良が加へられて、つひに今日の西洋紙となつたのです。それゆゑ、西洋紙、西洋紙とは申しますが、その先祖をだん〳〵調べて見ると、それは支那人の千八百年も昔の大發明が、もとになつて居るとは、驚くべきことではありませんか。

ローマへの道

この後漢の初めに、匈奴はまたその勢をもり返して來まして西域の國々を征服するとともに、漢の領土をも荒らしました。その中に匈奴は更に南北に分れて、爭を始めたので、漢は南方を保護し、兵を遣はして北匈奴を討ち、大いに之れを破りました。さうした


紀元千年代漢後
0 200 400 600 800 1000 粁
路線交西實 ———
——————
匈奴
漢
羌
烏孫
月氏
大宛
安息
ローマ帝國
ペルシア
ヒンドスタン
ダガマ
ヒンドスターン
ヒンドスタン
ペルシア
ペルシアン
ペルシアン
ペルシアン

上で一方には班超といふ人をして、西方の國々の平定をさせました。班超は僅か卅六人の勇士と共に、その使の道に上り、まづ鄯善といふ國に行きました。その國王は初めは之れを優待しましたが、匈奴の使者が來てから、態度をかへたので、班超は怒つて一夜匈奴の使者を襲ひ殺し、國王を驚かして漢に降參させました。それから他の國々をも勢に乘じて、次ぎ〳〵に從へ、つひにまた昔の西域都護を置くことゝしました。（班超の兄の班固は、歴史家（漢書の著者）として名高く、妹の班昭（曹大家）も、また文名があります。）

班超は西域のことに力をつくし、止まること前後三十一年、よく西方の外民族の心を服しました。が何分にも血氣の壯年で故郷を去つたきりで、白髮の老翁となりましたので、都こひしい心にはうちかてません、勅許を得て歸朝しました。その滯在中の一つの

(27)
(28) 漢代の風俗。上圖の下段は今まさに獵に出かけようとする有樣を現はしたもの、右は馬車、左は騎馬。上段は家庭內の起居の有樣であるが、特に坐禮を用ひて居る所に注意。下圖は饗宴の有樣を描き出したもの。卽ち下段左は厨房右は料理を運ぶところ。二段・三段は食堂。上層は音樂を奏して居る。兩圖ともに後漢時代の石刻(畫象石)に殘つてゐるものです。前に擧げた(8)(9)(12)(13)等の挿畫もみんなかういふ石刻にあるものです。この畫象石といふのは、後漢の時代のものが多く殘つてゐて、當時の繪畫の樣子などをも知るのによい藝術品です。

(27) 漢時代の風俗

(28) 同（後漢時代の畫象石によるる）

重大な仕事は、西方のローマ(當時支那では大秦といふ名でよびました)に、使を出して交通を開かうとしたことです。此の使者は、はる〳〵長い旅を西へつゞけて、安息(西洋史にいふパルチヤ)といふ國に着き、今のペルシヤ灣の岸まで行きましたが、更に西への航海の困難をきかされて、やむを得ず引き返へしました。それはローマの豐であり、金銀や夜光の珠や、珊瑚その他の珍奇のものに富むといふことが、知られて居たから、貿易の利を收めようとしたのでした。この旅行はかく目的を達することは出來ませんでしたが、然しなほ支那人の地理上の知識を、更に廣めさせたのも事實であり、又西方の貨物を、輸入する道を、一層廣めることゝもなりました。

又ローマの方では、昔から支那の絹を、大へんに珍重して居まし

たので、その絹は黄金と目方を同じくして、取引きされたといふことです。なほヨーロッパの古い地理書などには、支那のことを絹の國、蠶の國などと、呼んだこともある位です。それで支那に使を出さうとしたこともあつたさうですが、とかく邪魔があつて、甘く行きませんでしたが、後漢の末頃には、ローマ皇帝安敦（アントニウス・アントニウス？）の使と稱する者が、海路はる〳〵支那の南方に來て、交通を求めました。これは當時の西方の大文明國と、東方のそれとの握手であつて、世界史の上の一大事件とも申されませう。たゞそれは不幸にして永くはつゞきませんでした。

襁褓皇帝

元帝の後には幼い皇帝がつゞきました。中には生後僅かに百日位の皇帝もありましたので、支那の歴史には、襁褓皇帝―襁褓にくるまつてる皇帝―などとも記してゐます。かうなると外戚の人々が、勝手なことをしやすいのは當り前のことで、中にも梁氏といふのが、一番はびこつて來ました。桓帝は、其の餘りに我がまゝなのを怒つて、宦官と相談し、兵力を以て之れを倒し、その一族の家財は沒收して、せり賣にしたところ、その賣上げ金は、その年の租稅を、半分にへらしてもいゝ程であつたといふことです。

然し此の事件のために、宦官が政治上に、その勢力を振ふやうになりましたので、漢は一難去つてまた一難といふ、氣の毒な有樣に陷りました。宦臣はもと〳〵宮中の女官の取締をする、輕い役人

でありましたが、天子の側近く仕へる關係から、前にもあつたやうに、とかく政治に口を入れることが出來たのであります(これから後も支那では、此の宦官といふものが、ずゐぶん政治上にいろいろな事をしたことがあります)。餘りに宦官が勝手なことを始め出しましたので、官吏や學者の中には、その政治のやり方を攻撃するものが起りました。宦官はかういふ人々を壓迫し、或は殺し或は牢屋にぶちこんで、その安全を謀らうとしました。

それで正義をいひ立てゝ、惡人を除かうとすれば、皆ひどい目にあふといふのですから、人心は平和を得ることが出來ません。これはまた野心家の事をたくらむには、都合のいゝ時です。まづ張角といふものが、迷信を利用して、數萬の徒黨をあつめ、一騒動を起しました。この徒は黄色の巾をつけて、其の印としましたから、黄巾の賊といはれます。張角はその後間もなく死にましたが、部下は各地に散らばつて騒ぎを大きくしました。さういふ動搖に乘じて、袁紹は兵を率ゐて宮中に亂入し、宦官をみな殺しにして、皇室の安全をはかつたこともありました。

そのとき董卓といふものが出て來て、袁紹の勢力を破り、獻帝といふ天子を立てました。董卓は一族をみな大官につけ、財産もつくり、これで甘く行けば皇帝の位をも奪はう、しくじつてもこの財産で安樂に暮さうと、虫のいゝことを考へましたが、さうは問屋でおろしません、部下に殺されてしまひました。この人は大へん肥つて居たので、いたづら者がそのお臍に火を置いたら、日中からあ

け方まで、とぼつて居たといふお話もあります。

その後には詩人で武將の曹操といふ人が、獻帝をもり立てゝ、北方の勢力となり、之れに對して孫權や劉備が出てまゐりました。さうして後漢の天子は、ちようど渦の中にまきこまれた藁屑のやうに、たゞこの連中のつくる渦のまゝに、動かされるより仕方がありませんでした。

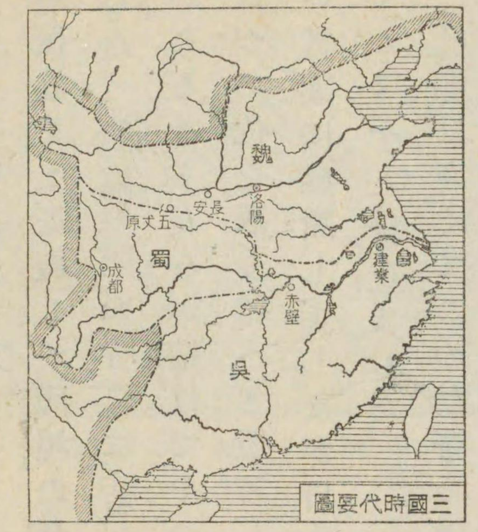
曹操は最も勢が強かつたから、南方を併せて統一をしようと考へ、水軍を率ゐて、揚子江を下り、孫權へ手紙を出して、「海軍八十萬をつれて、あなたの御領地で獵を致します」と申し送つた。これは戰爭をほのめかしたのであります、これに先つて孫權は、劉備と同盟がしてありましたから、部下の驚きにもかゝはらず、戰備をとゝのへ、劉備の軍と力を併はせて揚子江の中流の赤壁（今の武昌の附近）の下に之れを防ぎ謀を設けて、曹操の軍船を燒きうちにして大勝利を得ました。（これは二〇八年のこと。日本では應神天皇の御世の初め。）これから此の三つの勢力は、お互に結んだり、離れたりして、相爭ふこと十數年に及びました。

七　北方の嵐

——三國、晋、南北朝の時代——

水魚の交り

前に申した三人の中、劉備は今の四川省方面に、その根據地をつくり、その地は小さくはありましたが、智謀にすぐれた諸葛亮（字は孔明）と、武勇ならびなき關羽や張飛の如き武將を得て、北の曹操や東の孫權に對抗することが出來ました。その中に曹操の子の丕が後漢を滅して、自ら天子と稱し、國を魏と號しました。これは二二〇年のこと。劉備はもと漢の皇室の子孫と稱して居たものですから、自らそのあとをついで、漢の皇帝の卽位式を成都（四川省成都）で行ひました（この國を蜀とも蜀漢ともいひます。蜀とは四川省の異名です。）それから間もなく、孫權もまた皇帝を稱し、首府を建業（今の南京）に奠めました。



三國時代要圖

かく三つの國が出來て、力を爭ひましたから、これから晋の統一までを三國の時代といひます。

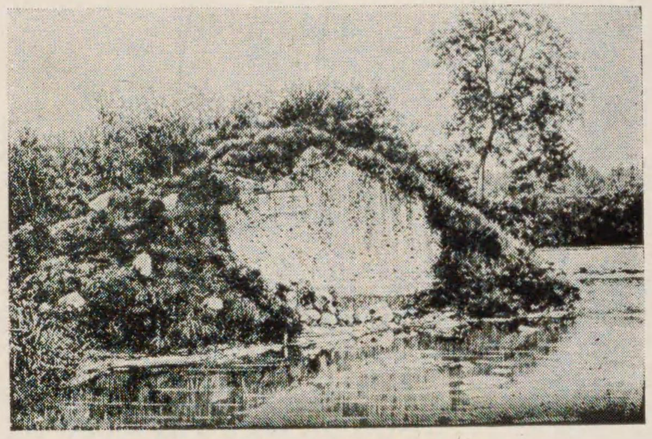
蜀の國の政につとめた諸葛孔明は、もと世の亂を避けて田舍にかくれて居たのを、劉備が尋ねて、その力をかしてと賴み、一度二度ならず、三度までも願ひに行つたので、劉備のために骨を折ることゝなつた人で、劉備は「自分が孔明の援を

得たのは、魚が水を得たやうなものだ」と、感謝してゐたといふことです。孔明は内に政をとゝのへると共に、その徳望を以て、南方の外民族をも征服して、國境の憂を絶ち、國勢を張ることにつとめました。劉備の死ぬ時には、「若し我が子にどうにか皇帝たるねうちがあるなら、どうか輔けてやつてもらひたい。さもなければ君が代つて位を取り給へ」と遺言した。孔明は涙を流して、その有り難い言葉に感謝しましたが、自分はあくまで幼主のために、忠實をつくしますと誓ひました。

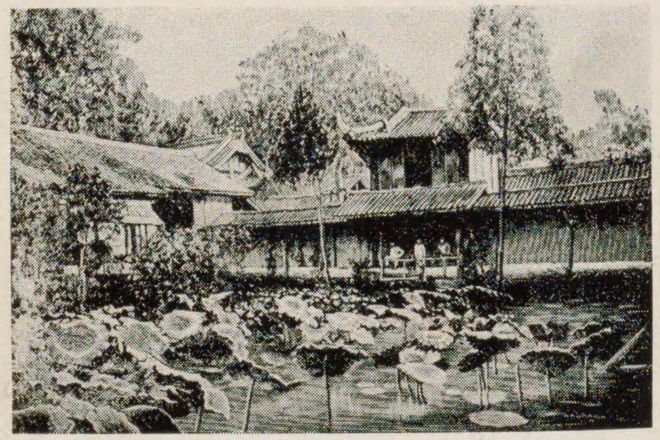
孔明はかくてこの幼帝を輔けて、一層内外の國務につとめました。魏を伐つときの上奏文（出師の表）の如きは、之れを讀んで泣かぬものは、人でないといはれた位に、一言一句、まごころを以てつゞら

(29) 赤壁。後漢の末に曹操の水軍を、孫權と劉備の聯合軍が擧破した古戰場は、湖北省嘉魚縣にあります。赤壁の名は後に宋の蘇東坡の「赤壁の賦」で、一層世にひろまりましたが、東坡が明月に乘じて舟遊して、古戰場を歌つた其の赤壁は、實は此處ではなかつたといふことです。

(30) 蜀の首府のあつた今の四川省成都縣城内にある、諸葛亮(孔明)の祠です。この祠堂の中の一つに、宋の忠臣岳飛が書いた孔明の「出師の表」が彫りつけてあるといふことです。岳飛は孔明の忠誠を慕つてゐたからでありませう。



(29) 赤壁の景 (湖北省嘉魚縣)



(30) 諸葛孔明の祠 (四川省成都縣)

れたものでした。魏を討ちに出ては、智をねり謀をめぐらして、敵の大軍を屢、なやましましたが、五丈原といふ所で、魏と對陣中、その智謀も忠實もいかんともしがたく、病のために、死の手にさらはれてしまひました。

この魏の征伐のとき、魏の大將の司馬懿は、大軍をもちながら、孔明の智謀に恐れをいだいて、男らしく思ひ切つて戰はうとする勇氣もない。そこで孔明は、或るとき女のかぶる頭巾を贈つて、「どうです、お似合ひになりますか」と、ひやかしたこともあります。孔明が死んだと聞いたから大よろこび、すぐさま進軍を命じました。ところが蜀の方では、その死んだ孔明を、さも生きてるやうによそほはせて、戰車に載せて向はせました。さては一ぱいくはされた

かと、魏の兵は恐れあわてゝ、逃げたといふ滑稽な話もあります。蜀は孔明によつてその國がもつて居たやうなものですから、その支へ柱がなくなると心細くなりました。その後、魏はとう〳〵蜀を滅してしまひました。二六三年のこと。そこで三國の爭は變じて魏と吳との攻爭となりました。

ところが其の魏では、かういふ戰爭に、功のあつた司馬氏一家が權力をふるひ、司馬炎といふ人は、つひに皇帝の位を奪つて自ら天子となり、國を晉と號しました。この人は晉の武帝です。そこで今度は晉と吳とが、相爭ふことゝなりましたが、晉は吳の國の衰へたのに乘じて、兵を南に下して之れを滅し、八十餘年の紛亂をしづめて、再び統一の政治をすることゝなりました。

竹林の七賢

晉の武帝は、一族をそれ〴〵大名にして、皇室に萬一の事のあつた時には、その守りが出來るやうに、厚く待遇しました。がそれは却つて諸大名を我がまゝにさせることゝなり、武帝の死後には、そのため八大名が代る代る出て來て、首府の洛陽で戰を始め、政權の爭奪をしました。こんな騷動は、晉を強くすることの出來なかつたこと、申すまでもありません。武帝はまた天下の統一を遂げた上は、まづ安心と、兵備をゆるめました。これも國を危くするもとであつたこと、いふまでもありません。

そんな風に、政治上、軍事上から、國のみだれたり、よわつたりする

原因があつたところに、清談といふわるい流行がありました。これは、國の爲めだの、社會のためだのと、まじめになつて努力することを卑しみ、それよりは酒を飲み詩を作り音樂でもして、心のどかに日々をおくることを、大へん高尚なことゝして、尊んだ風習なのです。これは三國の頃から起りはじめて來ましたが、晋になつては、上下の流行病となり、大臣でも政をとることなどをよそに、いういうと遊んで、恥ともしないものもあるやうになりました。

この清談の仲間の中で、最も有名なもの七人がありまして、世に竹林の七賢といつて居ります。みんな酒が好きで、中には三斗で始めて醉ふといふものもありました。外に出るときには、いつも僕に酒瓶をかつがせ「乃公が死んだら、これにいけてくれ」といつて居たものもあります。中には世の中の事務にまじめにつとめ、禮儀だの道德だのを說く者を罵つて、「世のいはゆる君子は、まるでヅボン下に居る虱のやうなものだ。虱は逃げるにも歩くにも、その縫目が尺度で、それでおれの行動進退は道にかなつてゐるといつたやうな樣子だが、それは君子がけちくさい行動をして、それで道德的だとうぬぼれて居るやうなものだ。然も一たび思はざる事件にでもあはうものなら、あわてゝしまつて何事も出來まい」などと、いつたものも居ります。

もと〳〵支那には、孔子のやうに、國家中心の政治を、主張する者もあれば、一方にはさういふものを、馬鹿にしてかゝる考へ方も、古くからありました。堯の時代に居た許由といふ人は、堯から天下

をゆづらうかといはれたとき、耳の汚れだといつて、川の水で耳を洗つたといふお話も傳へられて居ります。これは老子、莊子の思想や、此の清談などを喜ぶ人々に、共通な心持ちだつたのです。

さて此の他に、晉の厄介物であつたのは匈奴です。匈奴は後漢の時に、全く其の勢を失ひましたが、降參したものは、長城の南に移り、漢の姓の劉を稱することを許されて、山西省の北部に住んで居ました。晉の時その酋長に劉淵といふ者が出ると、晉の內亂や兵備の薄くなつたのにつけこんで、其の勢力を張り、ついで其の子の聰は兵を出して、三一七年晉を滅してしまひました。

晉が亡びましたときに、其の一族は南の建康（今の南京）で皇帝を稱し、其の後をつゞけることになりました。歷史の上では前の時代を西晉、これからを東晉といひます。（これは其の首府の方角からいつてつけたものです。）これで漢民族の政治の中心が、揚子江の南にうつり、棄てられた北方の黃河の流域は、主なき土地となつて、北や西からの外民族のために開放されました。かねゝ支那本部に、よりよき土地を求め、より高き生活を試みたいとねらつて居た外民族どもは、我れがちに、此の空地に襲ひ來つたのであります。

さういふ外民族を總稱して、五胡といつて居ます。胡といふのは、もと匈奴のことをいつた語ですが、後には一般的に西方北方の外夷を指す意味になりました。五胡とは、匈奴、羯（匈奴の同種）、鮮卑（東胡民族の一派）氐、